

鳥取城調査研究年報

第 6 号

2013.3

鳥取市教育委員会

目 次

- 鳥取城糸蔵跡(第20次調査)から出土した土器・陶磁器について(八井 興)… 1
- 鳥取市域の城郭 一陣城・景石城・鹿野城など—(西尾 孝昌)… 17
- 近代の鳥取城(5)
鳥取城の古写真について—新史料による評価の試み—(佐々木孝文)… 34

例　言

1. 本年報は、平成24年度の史跡鳥取城跡附太閤ヶ平に係る調査研究成果の報告書である。
2. 今年度は、史跡鳥取城跡附太閤ヶ平既往の調査に基づく研究論文を掲載し、また、鳥取市教育委員会の調査成果の報告として資料紹介を掲載した。
3. 論考についての文責・著作権は執筆者に帰属する。
4. 本年報の編集は佐々木孝文（鳥取市教育委員会文化財専門員）が行った。
5. 本年報の作成にあたっては、多くの方に指導・助言ならびにご協力をいただきました。
ここに記して感謝いたします。また、多くの先駆の文献を参考させていただきました。

【機関・団体】

文化庁記念物課　鳥取県教育委員会文化財課　鳥取県立博物館　鳥取県立公文書館
鳥取県立図書館　鳥取市歴史博物館　鳥取県立鳥取西高等学校　鳥取県埋蔵文化財センター
　　鳥取市埋蔵文化財センター　鳥取市歴史博物館

【個人】

田中哲雄　吉村元男　麓和善　錦織勤　北垣聰一郎　浅川滋男　谷本進　伊藤康晴
中森祥　西尾孝昌　久保横二朗　吉田浅雄　神谷佳友　伊藤康晴　堀田浩之

（順不同・敬称略）

鳥取城跡から出土した土器・陶磁器について - 中世後期から近世にかけての分類と編年案 -

八 峰 興

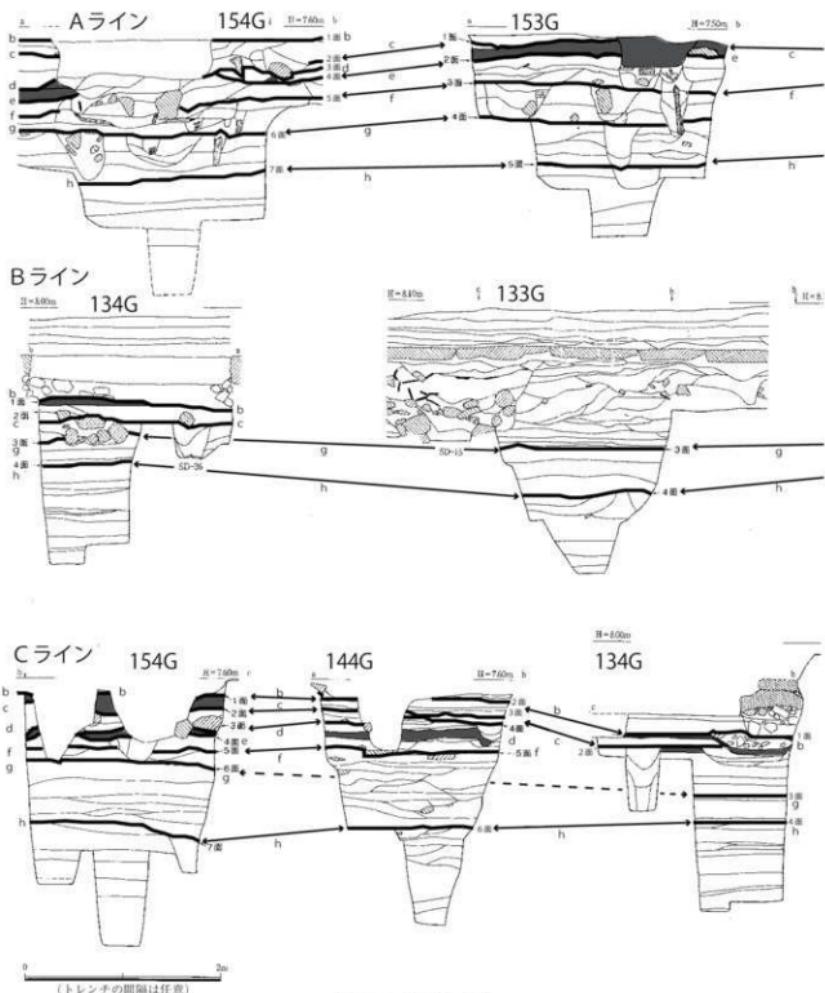
1はじめに－共通構面の設定について

鳥取城跡の現地調査はすでに終了し、報告も刊行された(財團法人 鳥取市文化財団2011)。この調査では初蔵跡のほか、複数のトレンチ調査を行い、併せてその成果も報告がなされている。そこでこの成果を活用し、鳥取城跡における土器及び陶磁器類を分類し、編年案を作成することとした。

第1～2図は報告書掲載の土層図をトレンチ調査位置に対応させたものである。とくに東西ラインをみると、調査地の西側に向かい緩やかに傾斜してこと、その上に中世末から近世にかけて黒褐色系や褐色系の土または真砂を盛土し、平坦面を形成して屋敷地としている。

第1表 鳥取城編年対応表

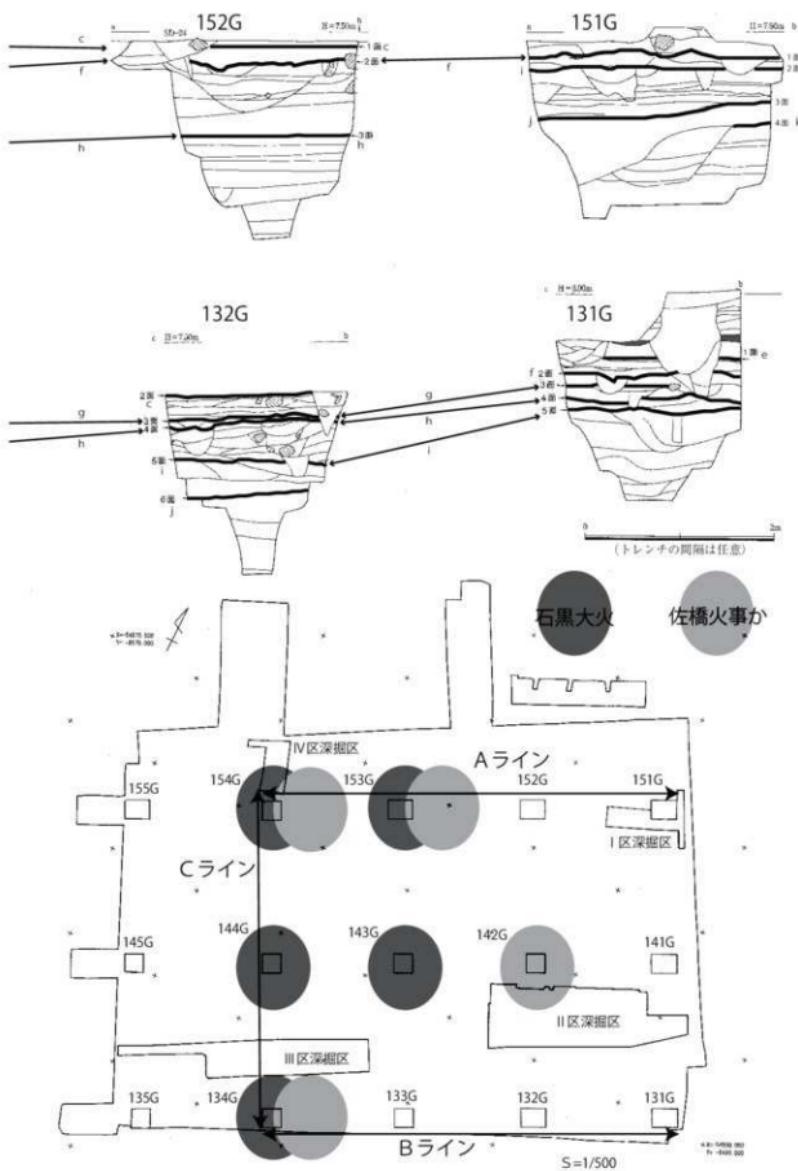
元号	西暦	面	期	土器・陶磁器の特徴	文献
明治12頃	1879	a面 鳥取城V b期	肥前(系)染付、瀬戸焼、因久山焼、浜坂焼、蒲富焼、日々部窯	鳥取城が破却される	
明治2	1869			鳥取城から政府の機能が移転される	
万延元	1860			三の丸の車輪が拡張される。この工事に伴い、「火除地」にあった初蔵の一部が、撤去または移築される	
安政5	1858		肥前(系)染付、瀬戸焼、越前窯、撻鉢、石見焼、布志名焼	「初蔵」の表記が絵図資料に初出	
天保10	1839	b面 鳥取城V a期	肥前(系)染付、瀬戸焼、越前窯、撻鉢、石見焼、布志名焼	「明地」の初蔵の存在が藩政資料に初出	
天保年間	1830～1843			空地のままおかれれる	
文化9	1812	佐橋火事。西館の上屋敷御殿は延焼を免れたが、鳥取城の防火のため、火災後に撤去され、跡地は空地とされる			
寛政年間	1789～1800	c面 鳥取城IV b期	肥前(系)染付、広東窯、関西陶器、越前窯、撻鉢、瀬戸焼、関西撻鉢、備前、染付	大きな変化はない	
寛延年間	1748～1750	d面 鳥取城IV a期	肥前(系)染付、越前窯、撻鉢、関西撻鉢	調査地の区画は大1・小3の4区画となる(大きい区画が西館池田家の上屋敷と考えられる)	
享保17	1732			西館の長屋から出火し、隣接する「会所」が半焼	
享保5	1720	石里大火。鳥取城と城下町の大半が焼失。「松竹御殿」も焼失。のち、同所に西館の上屋敷が再建され、文化年間まで存続			
享保3	1718	e面 鳥取城III c期	肥前染付、二彩手、刷毛目、落主が鳥取城に戻り、「松竹御殿」は再び西館の上屋敷として改称される		
正徳6	1716		鳥取城の大改修に際し、調査地にあった西館の上屋敷を本藩の藩主が借りりあり、改修して居館(「松竹御殿」)とする		
元禄16	1703		調査地の一部に、鳥取藩主の分知家・西館池田家の上屋敷が創設される		
延宝～元禄頃	1670～1703	f面 鳥取城III b期	肥前染付、波佐見、二彩手、武家屋敷の区画が9に減少する		
慶安3	1650		須佐唐津、関西撻鉢		
寛永9	1632		瀬戸窯、肥前染付、砂目唐津、波佐見唐津、筒形碗、備前	鳥取東屋宮が跡請される。このころ、調査地周辺は11区画の坪領敷地で占められていた	
元和5	1619	鳥取城III a期	備前、京都系土師器皿		
元和3	1617		瀬戸窯、絵唐津、輪目土唐津、備前、京都系土師器皿	池田光仲が鳥取城主となる(鳥取池田家の成立)	
慶長5	1600	g面 鳥取城II期	備前、京都系土師器皿	池田光政による鳥取城及び城下町の造営が開始される。調査地周辺が初めて絵図に現れる	
天正10	1582		瀬戸窯、絵唐津、砂目唐津、備前、京都系土師器皿	池田光政が鳥取城主となる	
天正8～9	1580～81		青花、天目、備前、瀬戸美濃	池田長吉が鳥取城主となる	
天正元	1573	h面 鳥取城I b期	京都系土師器皿、白磁、青磁、天目	宮部継満が鳥取城主となる	
天文14	1545	i面 鳥取城I a期	京都系土師器皿、白磁、青磁、天目	久松山に岡城が築かれる	
南北朝～室町	1333～	j面	土師質土器、瓦質土器、白磁、	山名義国が布施天神山城から久松山鳥取城に拠点を移す	
鎌倉	1192～		土師質土器、勝間田、瓦質土器	「水道谷」一帯に「沢市場」と呼ばれる集落が形成される	
平安	～1191		土師質土器		
弥生～古墳		k面	弥生土器、土師器、須恵器		



第1図 土層図(1)

第2表 遺構面対応表

G	対応面	G	対応面	G	対応面	G	対応面	G	対応面	G	対応面	G	対応面
131	1面 e	132	1面 b	133	1面 b	134	1面 b	151	1面 a	152	1面 c	153	1面 c
	2面 f		2面 c		2面 c		2面 c		2面 b		2面 f		2面 e
	3面 g		3面 g		3面 g		3面 g		3面 c		3面 h		3面 f
	4面 h		4面 h		4面 h		4面 h		4面 d		4面 k		4面 g
	5面 i		5面 i					5面 f		6面 h		5面 h	
	6面 j												6面 g
													7面 h



第2図 土層図（2）ほか

堆積層は、特に中世末から近世初頭にかけて厚く、上に2面の焼土層をもち、基本的には盛土を重ねながら堆積している。つまり鳥取城の成立から幕末期まで、層位的かつ面的に良好な状況で遺存しており、この成果を活用すれば鳥取城の編年を作成することが可能となる。報告の段階では各トレンチの遺構面と、層群という大きな解釈に留まり、これより細かな時期設定まではなされていない。

そこで2層の「焼土層」をいわゆる鍵層とし、遺構内出土遺物から各遺構面の時期を比定し、各トレンチの遺構面から、「共通遺構面」を設定し、編年案を作成することにした。報告でも記載されているように2層の焼土層のうち1つは「石黒大火」のため、上層にあたる焼土層を「佐橋火事」と仮定した。

各トレンチで最も遺存状況のよい154グリッドを「モデル」(第1図)とする。a面(鳥取城V b期・以下鳥取城を省略):初蔵・幕末期。b面(V a期):佐橋火事の文化九(1812)年から初蔵が確認された安政五(1858)年まで。c面(IV b期):陶磁器類の編年観から18世紀後半から佐橋火事前まで。d面(IV a期):石黒大火の享保五(1720)年から18世紀前半まで。e面(III c期):肥前陶磁の編年観から、18世紀初頭から石黒大火まで。f面(III a・b期):肥前陶磁ほか、貿易陶磁と在地産土器類の年代観から、17世紀前半をIII a期、後半をIII b期まで。g面(II期):肥前産陶器や貿易陶磁、京都系土器類の編年から、秀吉により鳥取城が落されて宮部氏の支配から池田光政の治世、概ね16世紀末から17世紀初頭まで。h面(I b期):以下、京都系土器類、貿易陶磁、在地産の土器・陶磁器や国産陶器の年代観から、布施天神山城から拠点が移されたとされる天正元(1573)年からと鳥城が落城するまでの16世紀後葉頃。以下、132グリッドによると、i面(I a期):久松山に出城が築かれたとされる16世紀中葉頃。j面以下は中世の「沢市場」の集落があるとされる室町以前、平安期まで。k面は古墳から弥生時代とした。

2 編年案

■中世Ⅱ～Ⅲ期：平安時代末から鎌倉時代初頭

【在地土器】21は土師質の壺、22・24は須恵器、22は外面に格子状のタタキ、内面カキメの勝間田系の壺、23は瓦質土器の受け口の鍋である。21は131G 4面下の(暗)灰色粘質土、22は132G 5面検出のSK-78、23は127G 3面検出のP-127、24は153G 5面下から出土した。

■中世Ⅲ～Ⅳ期：鎌倉時代～南北朝時代

【在地土器】25～27は底面回転糸切りの土師質の小皿、28・29は瓦質の鍋である。25は142G IV層群粗砂中、26は153G IV層群灰黄色砂層、27は144G IV層群⑤灰色砂質土から出土した。28は151G 1面検出のSK-51のものであるが、下層からの混入と考える。29は131G 5面検出のSK-79から出土した。

■中世Ⅳ～Ⅴ期：室町時代

【貿易陶磁】1～3は龍泉窯系の青磁で、1は皿、2は碗、3は盤である。1は142G 5面検出のSK-73、2は152G 2面検出のSD-27、3はII区層中から出土した。

【在地土器】30・31は土師質の小皿、器壁は薄く、底径は小さい。15世紀の所産。32は土師質の鍋、33は瓦質の羽釜で、いずれも口縁部の退化が著しい。30は154G II層群P 130～132から2層除去後、31は初蔵面のSK-19で混入品、32は141G IV層群灰黒粗砂、33は初蔵面検出のSX-04から出土した。

■鳥取城 I a期

【貿易陶磁】4～7は景德鎮窯系の白磁、8は景德鎮の染付、12は胎土や外面のケズリの状況などから、中国産の天目碗である。4は142G II～III層群、黒褐色砂質土掘下中、5は132G 3面下10cm程の灰黄褐色粘砂質土中、6は143G III層群③黄灰色粘砂質土検出面からの掘下げ中、7は151G 1面検出のSK-51、8は131G 2～3面の包含層(褐灰色粘質土)、12は141G 2面検出のP-148から出土した。

【国産陶磁】9～11・13は瀬戸・美濃陶器。9～11は皿で、9の内面は蓮弁文を模している。13は天目碗である。9は153G III～IV層群黒褐色粘砂質土、10は131G 2～3面の包含層(褐灰色粘質土)、11は133G 4面検出のSK-81、13は初蔵面検出のSX-02から出土した。

【京都系土器類】34・35は小型、36～38は中型で器は深く、口縁部はやや外反気味で口縁端部をやや外方向に摘まむ。天神山Ia-5～6並行期(第3図)。34は153G III層群、35は132G 4面下包含層中、36は144G 6面検出のSD-34、37は143G III層群黒褐色泥砂混じり粘質土と③の下層の暗灰色粘砂真砂層(灰色粘質層の上まで)

第3表 主要遺構内土器・陶磁器一覧（グリッド深掘内）

【131グリッド】

面	遺構等	出土遺物	時期
P-100	染付		17C前半～
P-138	越前窯・描鉢、刷毛唐津、染付		18C～
P-156	中近世土師器		
	SK-55 染付		18C前半
1	P-157 中近世土師器皿		
1 e	P-158	-	
2 f	P-161	-	
3	P-164 中近世土師器		
3 g	P-165	-	
3 h	P-166	-	
4 i	P-170	-	
5 j	SK-79 中近世土師器、瓦質土器	15～16C	
5 k	P-174	-	
5 l	P-175	-	
5 m	P-176	-	
5 n	P-177	-	
5 o	P-178	-	

【132グリッド】

1 b	SK-67 肥前染付、唐津、中近世土師器	18C後半～19C初
1 c	P-136	-
1 d	P-137 肥前陶器皿か	18C～
2 e	P-141 陶器	
2 f	P-142 土師器皿、瓦質土器	
3 g	SK-69 土師器皿、青磁、白磁、瓦質土器	16末～17初
4 h	SK-70 土師器皿	16C後半
4 i	SK-71 土師器皿、青花	16C後半
4 j	SK-72	-
5 k	SK-78 勝間田、中近世土師器、瓦質土器	14～15C
6 l	SD-35 144Gか、土師器	古墳時代～

【133グリッド】

1 b	SK-84 133Gか、染付	
1 c	P-173	-
2 d	SD-38 刷毛唐津、染付	18C
2 e	SX-12 陶器	
2 f	P-189	-
3 g	SK-80 中近世土師器	
3 h	P-190	-
3 i	P-191	-
4 j	SK-81 濱戸美濃	16C後半
4 k	SK-82	-
4 l	P-192	-

【134グリッド】

1 b	SK-77 染付、唐津、土師器	19C
1 c	P-168	-
2 d	SD-36 染付、陶器、土師器	18C
2 e	SD-37 染付、青磁、二彩手	18C前半
2 f	P-179	-
2 g	P-180 肥前染付、土師器	18C～
2 h	P-181 肥前染付、陶器	18C～
2 i	P-182	-
2 j	P-183	-
2 k	P-184	-
2 l	P-185	-
2 m	P-186 肥前染付、土師器	18C～
2 n	P-187	-
3 o	SK-75 染付、備前、刷毛唐津、土師器	18C
3 p	P-193 陶器碗	17C前半～
4 q	P-194	-
4 r	P-195	-
4 s	P-196	-

【144グリッド】

面	遺構等	出土遺物	時期
1 a	P-124	-	
1 b	SK-65 肥前染付		18C
2 c	SK-68 131Gか、越前	18～19C	
2 d	P-125	-	
3 e	SK-74 肥前染付、備前	17～18C	
3 f	P-160 備前	18C～	
3 g	P-162	-	
4 h	SD-33	-	
4 i	P-163 二彩手	17C後半～	
6 j	SD-34 土師器皿、備前	16C後半	

【151グリッド】

1 a	SD-25	-	
1 b	SD-29 弥生土器、備前	15～16C	
1 c	SK-51 白磁、瓦質土器	15～16C	
2 d	P-93 須恵器	古墳時代～	
2 e	P-120 土師器	古墳時代～	
2 f	P-121	-	
2 g	P-122	-	
2 h	P-123	-	
2 i	P-197	-	
3 j	SD-26 弥生土器、土師器	古墳時代～	
3 k	P-96 土師器	古墳時代～	
3 l	P-97 土師器	古墳時代～	
3 m	P-98	-	

【152グリッド】

1 c	SD-24 肥前染付、唐津、土師器皿	18C～
2 d	SD-27 肥前染付、青磁、唐津、瀬戸美濃、瓦質土器、須恵器、弥生土器	17C
3 e	P-127 瓦質土器	13C後半～
3 f	P-128	-
3 g	P-129	-

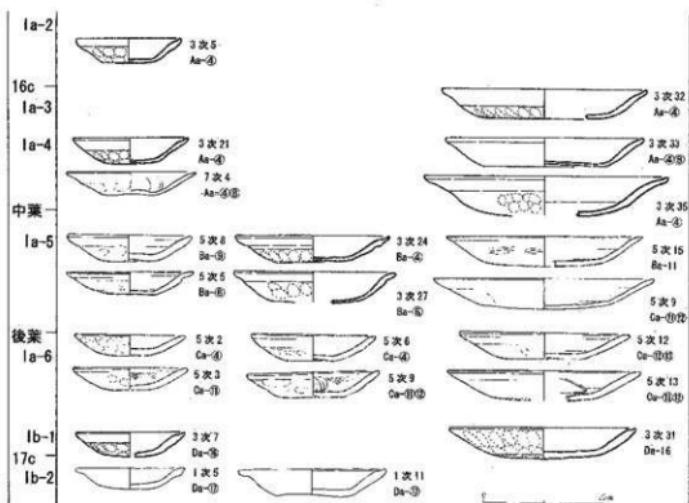
【153グリッド】

1 a	SK-49 染付、越前、土師器	18～19C
1 b	SK-50 染付、陶器、土師器	18～19C
1 c	P-80	-
1 d	P-81 陶器描鉢	
1 e	SX-16	-
1 f	P-101 刷毛唐津、土師器	18C～
1 g	P-102	-
1 h	P-103	-
1 i	P-104	-
3 j	P-198	-
4 k	P-199	-
5 l	P-135 土師器、須恵器	古墳時代～

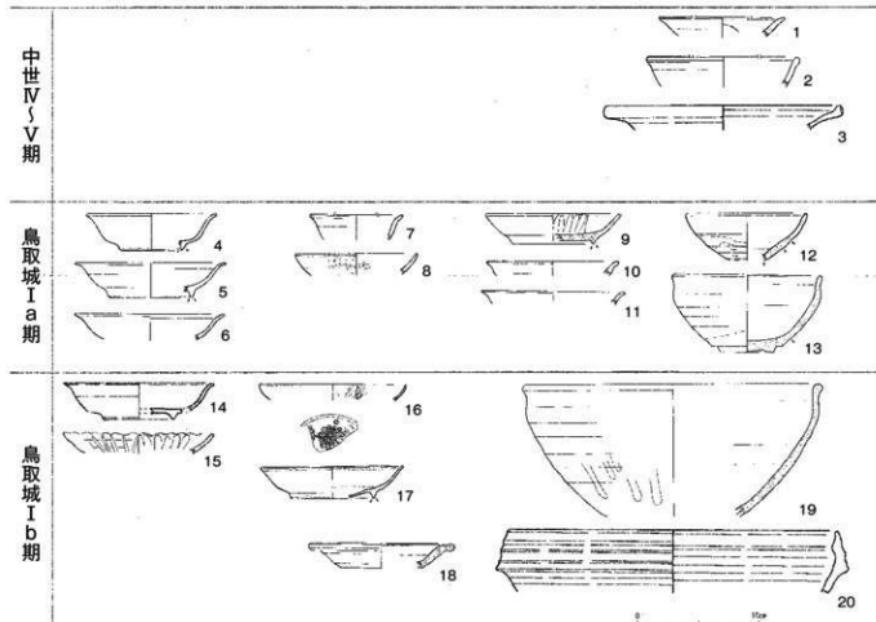
【154グリッド】

1 b	SK-13	-
1 c	P-117 肥前染付	18C後半～
2 d	P-126 染付、描鉢	18C後半～
2 e	SD-30 陶器	
4 f	SK-66 越前、陶器	18C
5 g	P-130 勝間田、土師器	16C後半～
5 h	P-131 染付	17C後半～
5 i	P-132	-
6 j	SD-32 青花、土師器	16C
6 k	SD-42	-
6 l	P-133	-
6 m	P-134	-
7 n	SD-43	-

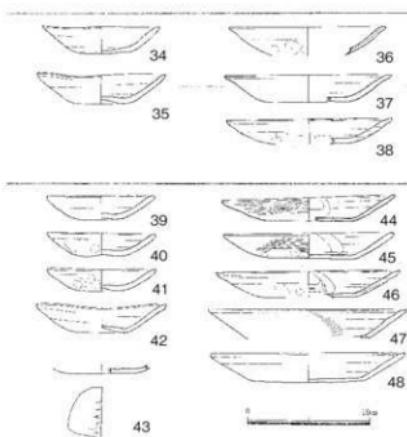
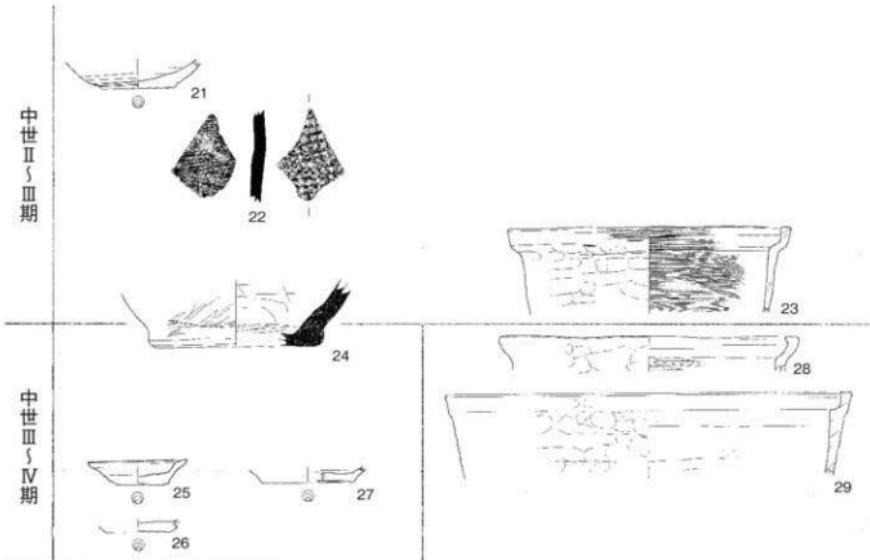
* 分類の結果は、筆者が見分できた遺物のみ記載した。また遺構内から出土した土器・陶器については、該当する時代に遡る遺物も含めた。時期は貢ね生産地での年代綱、在地土器については筆者の編年（八幡 2004、2011）による。



第3図 天神山遺跡から出土した京都系土師器皿の変遷（八峰2011から転載）



第4図 鳥取城編年案（1）



第5図 鳥取城縄年案（2）

から、38は132G IV層群から出土した。

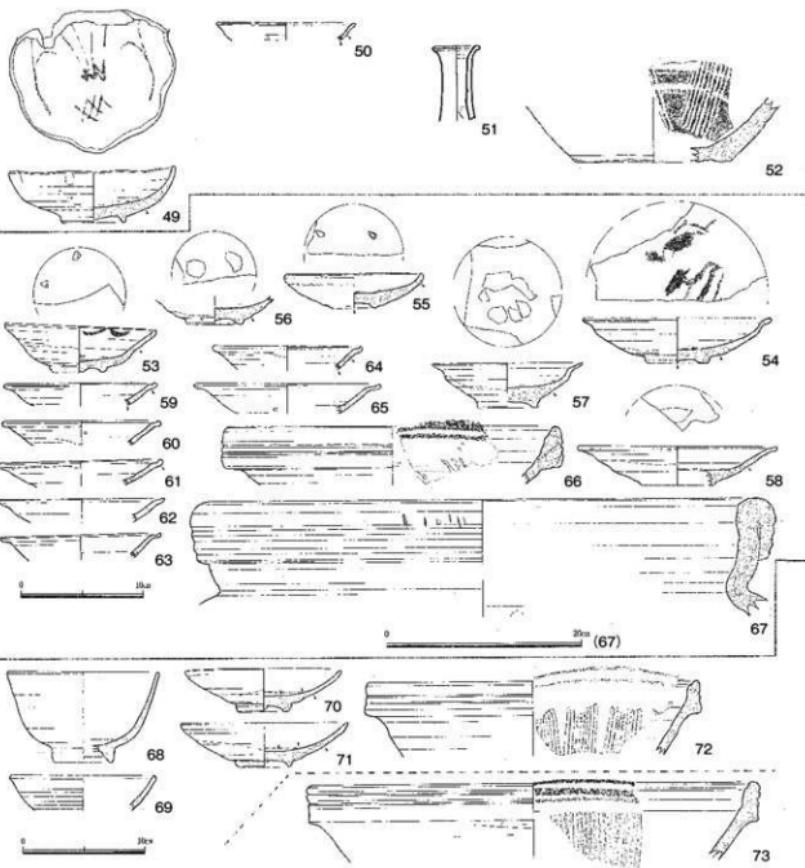
■鳥取城 I b 期

【貿易陶磁】14は中国産白磁、15・19は中国産青磁、16・17は景德鎮の染付である。14は132G 3面検出のSK-69、15は142G II～III層群黒褐色粘質土掘下げ中、16は143G III層群③黄灰色粘砂質土検出面からの掘下げ中、17はⅢ区IV層群紺藏面下1.2m、19はⅣ区D 4-D 5G II層群から出土した。

【国産陶磁】18は瀬戸・美濃、20は備前である。18は132G 3面下10cm、20はⅢ区A 6Gから出土した。

【京都系土師器皿】39～42は小型、43～48は中～大型で、口縁部な平坦な底面から直線状に外傾する。天神山Ia-6並行期（第3図）。39・42・44・47は132G 4面検出のSK-71、40・41・48はⅢ層群、41は4面下包含層中、43は142G III層群黒褐色砂質土掘下げ中、45は132G 3面検出のSK-69、46は132G 5面検出のSK-78から出土した。

鳥取城Ⅱ期



第6図 鳥取城編年案（3）

■鳥取城Ⅱ期

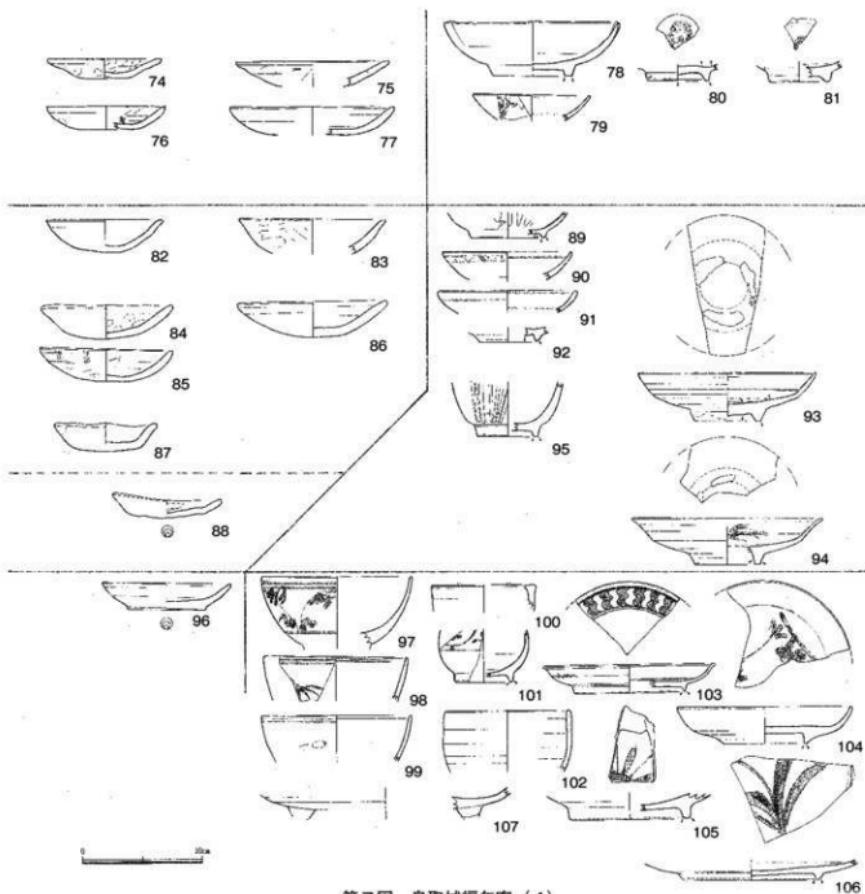
【国産陶器】49・50は肥前陶器で、49は焼成不良の芙蓉手の絵唐津。焼成不良の素地に白色の釉。50は碗または皿であろう。51・52は備前で、51は鶴頭徳利、52は擂鉢である。49はⅡ区Ⅲ層群、50は132G 4面検出のSK-70、51はⅡ区A 2G、52は132G 3面下黒褐色粘質土から出土した。

【京都系土器皿】74・76は小型、75・77は中型である。74・75の体部は外傾し端部の断面は菱形状を呈し、天神山城Ib-1並行期(第3図)。76・77は口縁部が内済する浅い器形である。74は132G 3面検出のSK-69、75は142G 3面上、76は132G 4面検出のSK-70、77は143G 3面層群黄灰色粘質土除去時に出土した。

【貿易陶磁】78は中国南方の輪花の青磁、79-81は染付で、80・81はスワトウと称される福建省漳洲窯の所産である。78は151G 2面層群、79は144G 3面層群灰黄色砂下の黒褐色砂質土、80は152G 3面上、81は142G 2-3面層群黒褐色砂質土掘下げ中に出土した。

■鳥取城Ⅲa期

【国産陶器】53-65は唐津で、53・54は絵唐津、59-65は溝縁皿で、55は胎土目積、53・56・57は砂目積で



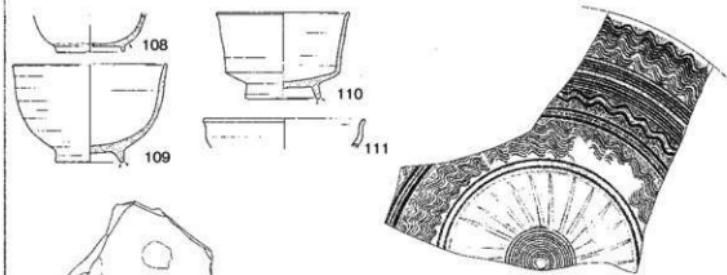
第7図 鳥取城縄年案(4)

ある。67は備前で、66は備前とは胎土も焼きも異なるため別地域の所産か。53はII区A 1GⅢ層群、57はII区A 2GⅢ層群の上層焼土面までの掘下げ中に、54は143GⅢ層群黄灰色粘砂質土除去時、63は144G 5面上、55は141G 1面掘下げ中に、58は141G 1～2面掘下げ中に、56は142G II層群黄橙色砂除去面(下に灰色砂)、59は134G 2面上、60は154GのP 130～132から2層除去面、61はIII区Ⅲ層群第212層、62は144GⅢ層群灰黄色砂下の黒褐色砂質土、64は132G 3面下黒褐色粘質土、65は153GⅢ層群第42層上遺構面から掘下げ中に、66は154G II層群P 130～132検出面上、67は織物面検出のSD-04から出土した。

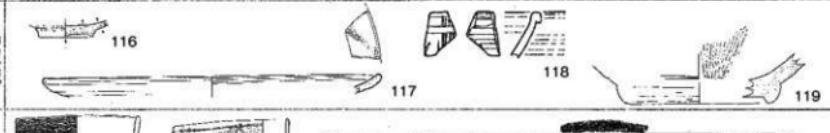
【在地土器】82～87は手づくね成形である以外は京都の影響は認め難い。時期が下るため天神山城期に並行するものは認められない。法量は單一で碗状を呈し底部は小さい。87は厚く口縁端部のみ外反する。82は153GⅢ層群暗灰色粘質土除去面(黄灰色粗砂質土上面)、83は134G 3～4面間、84は153GⅢ層群、85・86はII区A 1GⅢ層群、87は144G 5面上、88はI区区画2と3の間、灰色土層上面から出土した。

【貿易陶磁】89～92はいずれも漳洲窯で、89は青磁、90～92は染付である。89は144GⅢ層群灰黄色砂下の黒褐色砂質土、90は131G 2～3面の包含層(褐灰色粘質土)、91は132G 3面下10cm、92は152G 2面検出の

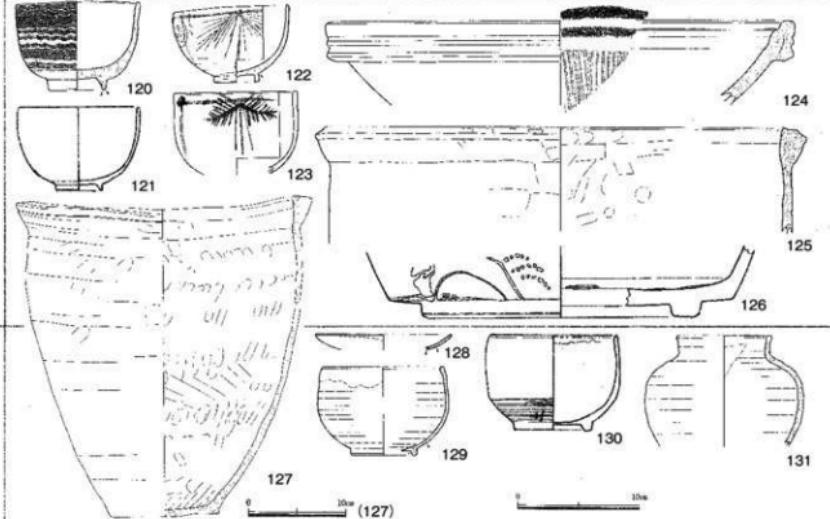
鳥取城III-C期



IV-a鳥取城期



鳥取城IV-b期



第8図 鳥取城縄年案 (5)

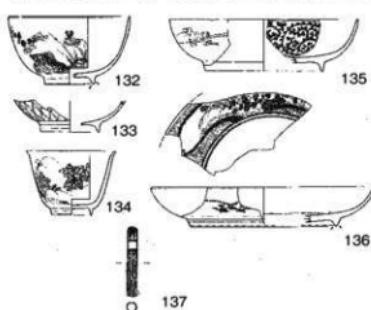
SD-27から出土した。

【国産磁器】93~95は肥前で磁器の生産が開始された頃のものである。いずれも染付で、93・94は蛇の目剥ぎの後に砂目の重ね焼き。胎土目のものよりは時期的に下る。93はⅢ区Ⅲ層群、94はⅡ区A1GⅢ層群黄褐色土(鉄分多)灰黄砂質土上層、95は131GⅢ層群検出のP-100から出土した。

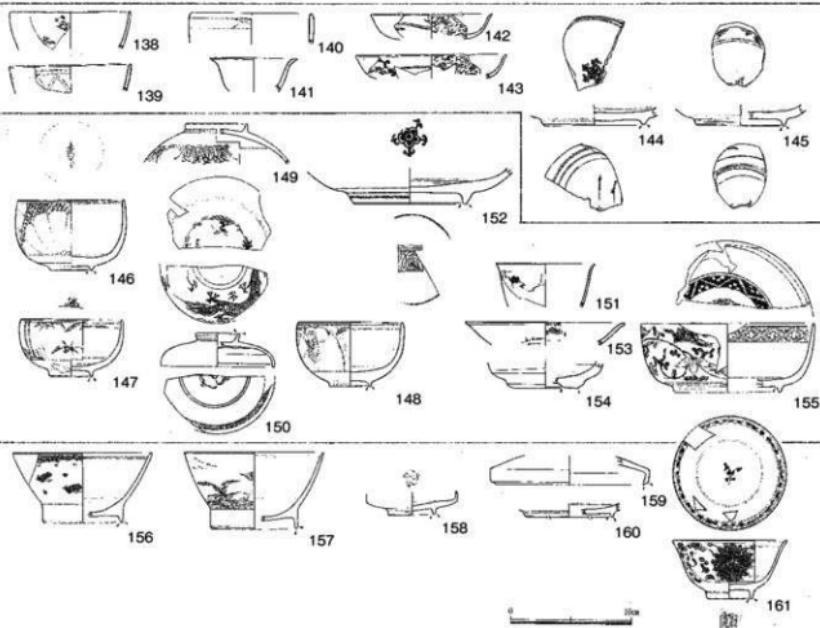
■鳥取城Ⅲ b期

【国産陶器】68・70・71は肥前で、69は北部九州か。72は備前または備前系。73は関西系の擂鉢で、詳細はⅢC期で述べる。68はⅡ区A1GⅢ層群、69は134G3面のP-193検出面上、70・71はⅢ区Ⅲ層群166層、72は143GⅡ層群暗灰粘砂質(黄灰色砂質土上面)から出土した。

【在地土器】96は浅い逆台形状で底面回転糸切り。同時期では鳥取城三の丸と倉吉市山名氏館跡推定地遺跡(八峰2011)に類例がある。143GⅢ層群暗灰粘砂質土(黄灰色砂質土上面)から出土した。



【国産磁器】肥前で国産磁器の生産が開始され、貿易陶磁は激減する。97~107はいずれも肥前を中心とする国産磁器である。102は長崎の波佐見で、100・102は青磁、他は染付である。97は132GⅢ層群1層目、105は132GⅢ層群ビット中から、98は141GⅡ層群、99・104は153GⅢ層群第42層上面、100は155GⅠ層群、101は154GⅡ層群1~2面下の焼土までの間から、106は154GⅢ層群検出のP-130~132から2層除去面、102は134GⅡ面検出のSD-37、103は初蔵面検出のSX-07黒褐色粘質土、107は



第9図 鳥取城縦年案 (6)

143GⅢ層群暗灰粘砂質土(黄灰色砂質土上面)から出土した。

■鳥取城Ⅲ c期

【国産陶器】111は瀬戸・美濃の天目であるが、108~110・112~114はいずれも肥前で、108は呉須絵、109は呉須平の碗。112は刷毛目、113・114は二彩手の大皿である。115は北部九州産か。73は焼きも堅牢で内面口縁端部下に凹線状の窪みが入る堺などの関西系擂鉢で、備前に下る。108はⅡ区Ⅱ層群2層目から、109は153GⅡ層群42層上面、110は153GⅡ層群21層、111は154GⅢ層群③④層、粗砂層直上層、112はⅢ区Ⅲ層群、113はⅢ区Ⅲ層群砂混じり黄褐色砂質土中から出土した。114は粉蔵面検出のSX-07のものであるが、時期的には遡るか。115はⅡ区A1GⅡ層群中から、73は155G2面検出のSD-28から出土した。

【国産磁器】132~137は肥前染付で、134はコンニャク印版である。焼土層出土で二次焼成を受ける。135は片打成形で二次焼成が顕著。137は筆管で、図化していないがコンニャク印版に筆書きを加えたもの、蛸唐草文の小丸碗など肥前製品の中でも上手のもの、二次焼成を受けたものが目立つ。132はⅡ区A1GⅡ層群上層焼土面对応層検出面までの間から、133はⅣ区D4·D5GⅡ層群、134は153GⅡ層群焼土層、135はⅣ区D4·D5GⅡ層群中、136はⅣ区D4·D5GⅡ層群、137はⅣ区D5GのP-17から出土した。

■鳥取城Ⅳ a期

【国産陶器】117は肥前で、116は嬉野、118・119は須佐である。116は140GⅡ層群面、117は144G4面検出のP-163、118は155Gの瓦溜り①、119は155G1面下約15cmから出土した。

【国産磁器】140のみ波佐見の陶胎染付で、144・145はコンニャク印版である。138は133G1面検出のSK-84、139は133G2面上、140は144G1~2遺構検出面上、141は141G1面掘下げ中、142はⅢ区A6GⅡ層群110層中、143はⅢ区Ⅱ層群、144は131G1~II層群検出のSK-55、145は134G2面検出のSD-36から出土した。

■鳥取城Ⅳ b期

【国産陶器】120は肥前の刷毛目碗で、121・126は瀬戸村で121は薄手の丸碗、126は水甕、122・123は関西系のしめ繩文の碗、124は堺擂鉢、125は越前甕である。肥前產は減少し、関西や東海、越前などの搬入が増加する。120はⅢ区A4G下層焼土層検出時か。121はⅢ区、122は粉蔵面検出のSD-15、123は粉蔵面検出のSD-04、124はⅣ区のSK-35、126はⅣ区、125は141G1面検出のSK-54から出土した。

【国産磁器】肥前のほか、147・148のような肥前系もある。146は134G1面上、147はⅡ区2G1面下から上層焼土層までの間から、155はⅡ区Ⅱ層群7.3m以下上層焼土層までの掘下げ中、148は143G1層群焼土底面、149は粉蔵面検出のSX-07、150はⅣ区I層群検出のP-33、151は144G3面検出のSK-74、152は153G1面検出のSK-49、153は132G1面検出のSK-67、154は134G2面検出のSD-36から出土した。

■鳥取城V a期 ■鳥取城V b期

【国産陶器】127は越前甕、128は備前の灯明皿、129は石見の碗である。130は布志名の碗で、高台内や外面上の露胎部に墨痕がある。布志名の碗は複数出土しているが、いずれも所有者名の墨書を記す。131は越前の小型甕。石見・出雲産の陶器が加わる。127は153G1面検出のSK-49、128は144G3面検出のP-160、129は粉蔵面検出のSX-07底面上、130はⅣ区炭層上面から出土した。131はⅣ区Ⅱ層群下層焼土層下面のものか。

【国産磁器】156・157の肥前もしくは肥前系の広東碗や、158の肥前とみられる筒碗、159の蛸唐草文の蓋、160の皿がある。156はⅡ区I層群A1G1面下から、157はⅣ区I層群、158は粉蔵面検出のSD-15、159は143G1層群暗灰粘砂質土(粉蔵面検出面からの掘下げ)、160は152G2面検出のSD-27から出土した。

【貿易陶磁】161は清朝のコバルト釉の染付。嗜好品とみられる。粉蔵面検出のSD-19から出土した。

3 土器及び陶磁器の傾向

【中世II~V期】平安時代末から鎌倉時代に、土師質土器の壺や小皿、勝間田系須恵器が、室町期にかけて土師質土器の皿や瓦質土器の鍋・羽釜、青磁などが出土する。

【鳥取城I期】I a期、16世紀中葉頃から京都系土師器皿や白磁や青磁、天目などの貿易陶磁、備前、瀬戸・美濃製品が出土し、城としての機能が開始されたと考える。I b期には急激に土器・陶磁器が増加し、この頃に天神山城から主要な機能が移転したと理解したい。京都系土師器皿の一括廃棄土坑のほか、貿易陶磁の白磁や青磁、景德鎮の染付が出土する。国産陶器には備前の擂鉢や瀬戸・美濃の碗皿類がみられる。

【鳥取城Ⅱ期】概ね宮部郷から池田光政頃。京都系土師器皿のほか、唐津の皿や絵唐津、備前が出土する。貿易陶磁では、中国南方産の青磁や、漳州窯の染付も出土する。

【鳥取城Ⅲ期】池田光仲から石黒大火までの間で、Ⅲa期は唐津の溝皿や絵唐津と備前が出土する。貿易陶磁も出土するが肥前では磁器生産が開始され、搬入される。Ⅲb期からは肥前の陶磁器が主体となり、波佐見も若干出土する。Ⅲc期にかけて擂鉢は備前から堺・明石など関西系に主体が移る。この時期は刷毛目や二彩手の大皿や印判手、型打成形、筆管などの肥前製品の中でも比較的上手の品が目立ち、流通品である波佐見の陶胎染付は僅かに留まる。また二次焼成を受けた優品も多く、石黒大火に加え、西館池田家や松竹御殿などが移されたという遺跡の性格と関係があるのかもしれない。

【鳥取城Ⅳ期】石黒大火と佐橋火事との間で、Ⅳa期は、陶器は肥前のほか、嬉野の皿、須佐の擂鉢など。肥前の染付は多いものの大物は少なく小中型品が中心となる。Ⅳb期は陶器では肥前の刷毛目碗、関西系陶器碗、瀬戸村の碗がある。擂鉢は関西系、浅鉢は瀬戸村、堺は越前と搬入経路の多様性がみられる。磁器は肥前の丸碗が中心ではあるが、いわゆる肥前系と呼称される肥前とは別地域の染付も定量出土する。

【鳥取城Ⅴ期】佐橋火事以降、火除け地、初蔵となる。なお、143Gと144Gからは上層の焼土層は確認されておらず、文献に「西館の上屋敷御殿は延焼を免れた」とあり、位置的にみても興味深い。遺物の時期はa期とb期に細分できるものの、全体的に少ないため一括する。V a期は初蔵以前で、陶器は備前の灯明皿、越前の壺甕、石見や布志名の碗など周辺地域が多く、磁器も肥前系が主体となる。嗜好品とみられる清朝染付もある。V b期は在地窯の生産も加わる。

4 まとめと今後の課題

鳥取城初蔵の調査では幕末期の遺構である初蔵跡のほか、こうした下層の遺構を確認するためのトレンチ調査も行われたため、中世末から近世にかけての概要が明らかになりつつある。今回のテーマである共通遺構面については、周辺地域の調査でも応用可能であるため、今後とも追・再検討を行い、精度を高めていく必要がある。

今回は初蔵期以降の陶磁器類は検討していない。幕末期から明治初頭にかけては、肥前、瀬戸、出石の磁器、越前、備前、石見、布志名の陶器などの搬入品のほか、幕末期の在地窯製品として、因久山焼、浜坂焼、牛ノ戸焼、曳田焼、浦富焼、日下部窯などが定量確認できているものの、当該期の研究は開始されたばかりであり、福井焼など伝世品すらないものも含まれると考えられる。幕末期以降の状況については、今後の研究の進展を待ち、あらためて報告したい。

また遺物の年代観について、近世の陶磁器類については特に齟齬は認められないものの、京都系土師器皿の編年観は報告書と大きな隔たりが生じた。今回は前の守護所である天神山遺跡との連続性と遺構検出面及び出土陶磁器の年代観を加味して判断したが、この点についても今後検討していく必要があるだろう。

今後は、出土品の詳細な分類とカウントと層位的な調査の成果と併せ、城下に加えて周辺集落との要相とも比較し、遺構のみならず遺物からも鳥取城の総合的な復元を望みたい。

5 おわりに

今回の報告は、鳥取城初蔵跡の発掘調査中から今年度までの間、断続的にではあるが遺物を検討させていただいた成果を総括したものである。今後さらに精度を高めるため、ご指導いただければ幸いである。

なお陶磁器類の年代観については、陶磁器全体の分類も含め、元九州陶磁文化館の大橋康二氏にご指導いただいた。また、貿易陶磁器全般・堺擂鉢について堺博物館の續伸一郎氏、瀬戸・美濃製品は愛知学院大学の藤澤良祐氏、越前は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの木村孝一郎氏、明石擂鉢は明石市教育委員会の稻原昭嘉氏、岡山市教育委員会の備前は乘岡実氏、須佐は益田市教育委員会の佐伯昌俊氏、出石は兵庫県立考古博物館の岡田章一氏、兵庫県立歴史博物館の鈴木敬二氏、豊岡市教育委員会の潮崎誠氏、石見は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの東森晋氏にご教示いただき、その成果を反映した。

最後になりましたが発掘調査時からこれまで、遺物の検討にご協力いただいた鳥取市教育委員会、財団法人鳥取市文化財团埋蔵文化財センターの皆様にお礼申し上げます。

【参考文献】

国立歴史民俗資料館 1993「日本出土の貿易陶磁」

大橋康二 1989「肥前陶磁」ニュー・サイエンス社

大橋康二 1990「肥前磁器の変遷－技法と器形からみた－」『柴田コレクション展（I）』

福原昭嘉 2000「明石藩鉢の編年について」『第12回関西近世考古学研究会大会』

東森晋 2001「第5章 まとめ」『石見焼関連遺跡調査報告1（飯田A遺跡・長東坊師窯跡）』鳥取県教育委員会

江戸遺跡研究会 [編] 2001「堺・明石藩鉢」「江戸考古学事典」柏書房

八幡興 2004「山陰の中世土器に関する観書」『中近世土器の基礎研究』XVII 日本中世土器研究会

桑岡実 2005「備前」「全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」

愛知県 2007「愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系」

木村孝一郎 2008「越前焼の編年の研究ノート」「吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

桑岡実 2008「江戸時代の遺跡出土の備前焼・瀬戸内地域を中心に」、白谷朋世「備前焼灯明皿考」「江戸時代の暮らしと備前焼」備前市歴史民俗資料館紀要10

佐々木孝文 2009「鳥取城「火除地」の変遷」「鳥取城調査研究年報」第2号 鳥取市教育委員会

佐伯昌俊 2010「近世須佐焼に関する一考察」「山口考古」第30号

八幡興 2011「絵図と発掘調査で読み解く山名氏の布施天神山城－理論からのアプローチ－」「鳥取地域史研究」第13号

財團法人 鳥取市文化財团 2011「鳥取城朽蔵跡（第20次調査）発掘調査報告書」

第4表 土器・陶磁器観察表（1）

遺物番号	報告番号	取上番号	遺構名	位局名	生産地	種別	形状・文様	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	生産年代	備考
1	140	3608	SK-73	龍泉窯	青磁	劃花文	皿	—	—	—	—	13～14C	
2	143	2640	SD-27	龍泉窯	青磁	無文か碗	皿	※12.0	—	—	—	15～16C	
3	—	1624	Ⅱ区	龍泉窯	青磁	蓮弁か	皿	※19.8	△21	—	—	13～14C	
4	152	3598	142 深	景德鎮窯系	白磁	—	高台付皿	※10.4	△2.95	※5.0	16C 中葉		
5	151	3698	132 深	景德鎮窯系	白磁	—	高台付皿	※12.0	△2.8	※6.6	16C 中葉		
6	153	3817	143 深	景德鎮窯系	白磁	—	皿	※12.0	—	—	—	16C 中葉	
7	154	2455	SK-51	景德鎮窯系	白磁	—	皿か杯	※7.4	—	—	—	16C 中葉	
8	146	3495	131 深	景德鎮窯	染付	—	皿	※9.8	—	—	—	16C 前半～中葉	
9	109	3273	153 深	瀬戸・美濃	灰釉	—	皿	※10.9	2.5	6.5	16C 中葉	3283	
10	107	3488	131 深	瀬戸・美濃	灰釉	—	皿	※10.2	—	—	—	16C	
11	108	3787	SK-81	瀬戸・美濃	灰釉	—	皿	※11.4	—	—	—	16C 後半	
12	149	3531	P-148	中国	天目	—	碗	—	—	—	—	明代前半	
13	104	1788・SX-02	瀬戸・美濃	天目	—	碗	※11.9	6.4	4.4	16C	1789		
14	—	3460	SK-69	中国福建省	白磁	—	皿	※12.4	3.1	※5.8	16C 後半	3463	
15	110	3598	142 深	景德鎮窯系か	青磁	—	皿	※12.1	—	—	—	16C 後半	
16	141	3817	143 深	景德鎮窯	染付	—	皿	※12.0	—	—	—	16C	
17	142	3262・Ⅲ区	景德鎮窯	染付	—	皿	※11.6	※6.7	※2.6	16C 後半～17C 初	3263		
18	106	3697	132 深	瀬戸・美濃	灰釉	折縁	皿	※11.2	—	—	—	16C 後半	大窓4
19	70	1654・IV区深	中国福建省	青磁	—	中型鉢	※24.0	—	—	—	16C 後半	1661ほか	
20	—	2445	Ⅲ区 A6G	備前	陶器	—	擂鉢	—	△5.2	—	—	16C	
21	161	3483・131 深	在地	土師質	—	皿	—	—	—	※5.9	12～13C	3484	
22	—	3446	SK-78	勝間田系	須恵器	—	壺	—	△7.6	—	—	13C	
23	162	3168	P-127	在地	瓦質	—	鍋	21.4	—	—	—	13C	
24	167	3258	153 深	勝間田系	須恵器	—	底部	—	—	—	—	12.8	13C
25	158	3603	142 深	在地	土師質	—	皿	—	—	—	—	13～14C	
26	160	3288	153 深	在地	土師質	—	皿	—	—	—	—	※5.2	13～14C
27	159	3669	144 深	在地	土師質	—	皿	—	—	—	—	※7.4	14C か
28	165	2456	SK-51	在地	瓦質	—	鍋	※22.2	—	—	—	14C	
29	164	3687	SK-79	在地	瓦質	—	鍋	※32.7	—	—	—	14C	
30	111	3339	154 深	在地	土師質	—	皿	※7.1	1.6	4.3	15C 中葉～後半		
31	114	1159	SK-19	在地	土師質	—	皿	—	9.4	2.1	6.8	15C 後半	
32	163	3529	141 深	在地	土師質	—	鍋	※28.1	—	—	—	15～16C	
33	166	966	SX-04	在地	瓦質	—	羽釜	※20.4	—	—	—	15～16C	
34	116	3237	153 深	京都系	土師器	—	皿	—	9.4	2.3	4.5	16C 中葉～後半	
35	127	3469	132 深	京都系	土師器	—	皿	—	10.5	2.45	4.0	16C 中葉～後半	
36	133	3661	SD-34	京都系	土師器	—	皿	※12.1	—	—	—	16C 中葉	
37	132	3843	143 深	京都系	土師器	—	皿	※13.4	2.2	※6.8	16C 中葉～後半		

第4表 土器・陶磁器観察表（2）

遺物番号	報告番号	取上番号	通称名	発掘位名	生産地	種別	形状文様	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	生産年代	備考
38	131	3436	132深	京都系	土師器	-	直	※ 135	※ 2.0	-	16C 中葉～後半		
39	125	3433	SK-71	京都系	土師器	-	直	88	1.95	3.8	16C 後葉		
40	126	3438	132深	京都系	土師器	-	直	88	1.85	-	16C 後葉		
41	124	3430	132深	京都系	土師器	-	直	8.75	1.85	4.5	16C 後葉		
42	129	3432	SK-71	京都系	土師器	-	直	10.4	2.3	4.0	16C 後葉		
43	139	3598	142深	京都系	土師器	-	直	-	-	-	16C	墨書有	
44	135	3465	SK-71	京都系	土師器	-	直	14.0	2.15	7.0	16C 後葉		
45	134	3618	SK-69	京都系	土師器	-	直	13.5	2.2	7.5	16C 後葉		
46	138	3450	SK-78	京都系	土師器	-	直	※ 149	※ 215	-	16C 後葉		
47	136	3425	SK-71	京都系	土師器	-	直	※ 16.0	-	-	16C 後葉		
48	137	3443	132深	京都系	土師器	-	直	※ 15.8	2.4	※ 9.5	16C 後葉		
49	82	1176	II区	肥前	陶器	絵唐津	芙蓉手皿	※ 135	4.5	※ 5.0	1590 - 1610 年代	焼成不良	
50	92	3424	SK-70	肥前	陶器	-	碗小直	※ 11.25	-	-	16C 末～17C 初		
51	-	959	II区 A2G	肥前	陶器	鶴頭	徳利	※ 39	△ 6.1	-	17C		
52	67	3698	132深	肥前	陶器	-	擂鉢	-	-	※ 12.7	16C 末		
53	84	1149	II区 A1G	肥前	陶器	絵唐津	直	12.3	3.7	4.1	1600 - 1630 年代	見込砂目	
54	83	3813	143深	肥前	陶器	-	直	※ 15.0	3.7	4.9	1600 - 1630 年代		
55	85	3099	141深	肥前	陶器	甚筒底	直	※ 11.0	※ 3.6	※ 2.8	1590 - 1610 年代	胎土目積	
56	98	3556	142深	肥前	陶器	-	直	-	-	※ 4.5	1610 - 1630 年代	見込砂目	
57	96	1151	II区 A2G	肥前	陶器	-	直	※ 12.1	3.65	4.8	1600 - 1630 年代	見込砂目	
58	97	3103	141深	肥前	陶器	-	直	※ 15.9	3.1	5.8	1600 - 1630 年代		
59	86	3795	134深	肥前	陶器	漢線	直	※ 12.0	-	-	1610 - 1630 年代		
60	88	3340	154深	肥前	陶器	漢線	直	※ 12.5	-	-	17C 前半か		
61	90	3854	III区	肥前	陶器	漢線	直	※ 13.1	-	-	17C か		
62	93	3658	144深	肥前	陶器	漢線	直	※ 13.3	-	-	1610 - 1630 年代		
63	91	3841	144深	肥前	陶器	漢線	直	※ 13.0	-	-	17C か		
64	87	3798	132深	肥前	陶器	漢線	直	※ 12.0	-	-	17C か		
65	89	3280	153深	肥前	陶器	漢線	直	※ 15.0	-	-	17C か		
66	63	3336	154深	備前系	陶器	-	擂鉢	※ 26.4	-	-	16 - 17C		
67	21	1763	SD-04	備前	陶器	-	壳	※ 55.0	-	-	16C		
68	99	1361	II区 A1G	肥前	陶器	-	碗	※ 12.2	3.75	※ 4.8	17C 前半		
69	100	3801	P-193	肥前か福岡	陶器	-	碗	※ 9.5	-	-	17C 前半か		
70	94	3853	III区	肥前	陶器	蛇目輪刺	直	※ 12.6	3.5	3.45	17C 第2～3四半		
71	95	1727	III区	肥前	陶器	蛇目輪刺	直	13.5	3.1	4.1	17C 第2～3四半		
72	64	3774	143深	備前	陶器	-	擂鉢	※ 26.8	-	-	16 - 17C		
73	65	2826	SD-28	堺	陶器	-	擂鉢	※ 36.2	-	-	17C 後半		
74	123	3463	SK-69	京都系	土師器	-	直	※ 9.2	1.65	※ 4.4	16C 末		
75	130	3555	142深	京都系	土師器	-	直	※ 11.5	-	-	16C 末		
76	128	3421	SK-70	京都系	土師器	-	直	※ 9.7	△ 1.9	※ 5.2	16C 末～17C 初		
77	122	3811	143深	京都系	土師器	-	直	※ 13.3	-	-	16C 末～17C 初		
78	144	2454	中国	福建省	青磁	輪花	直	※ 14.6	△ 4.5	※ 6.6	16C 後半～17C 初		
79	145	3658	144深	中国	染付	-	直	※ 9.3	-	-	16C か		
80	156	3165	152深	津洲窯系	染付	-	直か	-	-	4.7	16C 末～17C 初		
81	157	3568	142深	津洲窯系	染付	-	直か	-	-	4.5	16C 末～17C 初		
82	115	3807	153深	手づくね	土師器	-	直	9.3	2.7	3.5	17C 初頭		
83	117	3802	134深	手づくね	土師器	-	直	※ 11.6	-	-	17C 初頭		
84	121	3238	152深	手づくね	土師器	-	直	10.5	2.8	-	17C 前葉		
85	119	1356	II区 A1G	手づくね	土師器	-	直	10.7	2.7	-	17C 前葉		
86	120	1355	II区 A1G	手づくね	土師器	-	直	11.8	3.0	-	17C 前葉		
87	118	3632	144深	手づくね	土師器	-	直	7.9	2.3	5.0	17C 前半		
88	112	922	I区	在地	土師質	-	直	8.6	※ 1.5	※ 6.7	17C 前半		
89	155	3668	144深	津洲窯系	青磁	-	碗か	-	-	5.8	16C 末～17C 前半		
90	147	3495	131深	津洲窯系	染付	-	直	※ 10.2	-	-	16C 後半～17C 初		
91	148	3698	132深	津洲窯系	染付	-	直	※ 11.1	-	-	16C 末～17C 前半		
92	150	2663	SD-27	津洲窯系	染付	-	直か	-	-	4.6	16C 末～17C 前半		
93	81	2343	III区	肥前磁器	染付	-	直	※ 14.3	※ 3.9	5.3	1610 - 1630 年代	蛇目輪刺→砂目積	
94	79	1243	II区 A1G	肥前磁器	染付	-	直	※ 15.4	3.8	※ 5.3	1610 - 1630 年代	蛇目輪刺→砂目積	
95	78	2699	P-100	肥前磁器	染付か	-	碗	-	-	4.2	1610 - 1630 年代		
96	113	3774	143深	在地	土師質	-	直	※ 10.3	2.2	6.5	17C 中葉		
97	74	2724	132深	肥前磁器	染付	唐草文	碗	※ 12.2	-	-	1630 - 1640 年代		
98	57	3092	141深	肥前磁器	染付	軟質	碗	※ 11.5	-	-	17C 後半か		
99	73	3236	153深	肥前磁器	染付	-	碗	※ 12.1	-	-	17C か		
100	10	3051	155深	肥前磁器	青磁	-	香炉	-	-	-	17C 後半～18C 初		
101	52	3305	154深	肥前磁器	染付	-	瓶	-	-	4.5	17C 後半頃		

第5表 土器・陶磁器観察表(3)

遺物番号	報告書番号	取上番号	遺構名	層位名	生産地	種別	形状文様	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	生産年代	備考
102	12	3729	SD-37	波佐見	青磁	-	碗	※ 9.9	-	-	1630 - 1640年代	3734	
103	27	1391	SX-07	肥前磁器	染付	捺花文	皿	※ 13.7	2.3	※ 8.9	1660 - 1680年代		
104	80	3232	153深	肥前磁器	染付	竹文	皿	※ 14.1	3.0	※ 6.7	1630 - 1640年代		
105	76	3420	132深	肥前磁器	染付	-	皿	-	-	※ 10.0	1630 - 1640年代		
106	75	3329	154深	肥前磁器	染付	大型	皿	-	-	※ 11.0	17C後半	3366	
107	77	3774	143深	波佐見	青磁	三足付	盤	-	-	-	1630 - 1660年代		
108	56	950	II区	肥前陶器	呉須繪	山水文	碗	-	-	5.2	1660 - 1690年代		
109	53	3228	153深	肥前陶器か	呉須平	無文	碗	※ 12.4	7.9	5.7	17C後半	3229ほか	
110	54	3279	153深	肥前陶器	-	無文	碗か鉢	※ 10.7	7.0	6.0	17C後半か		
111	105	3370	154深	瀬戸 ³ ・美濃陶器	天目	-	碗	※ 13.0	-	-	17C後半		
112	103	2725	III区深	肥前陶器	刷毛目	-	皿	41.7	10.4	11.4	17C後半		
113	102	1302	III区	肥前陶器	二彩手	-	皿	※ 44.9	-	-	17C	1567	
114	31	1409	SX-07	肥前陶器	二彩手	-	皿	-	-	※ 11.7	17C中葉～末		
115	69	1357	II区A1G	北部九州	施釉	-	鉢か	※ 30.0	-	-	17C		
116	59	2862	140深	内野山窯	青峰	蛇目釉	皿	-	-	※ 4.5	17C末～18C前半		
117	101	3648	P-163	肥前陶器	二彩手	-	皿	※ 27.0	-	-	17C後半～18C前半		
118	-	2813	JL溜り①	須佐	陶器	鉄袖	擂鉢	-	-	-	17C末～18C前半		
119	68	2828	155深	須佐	陶器	鉄袖	擂鉢	-	-	※ 11.0	17C末～18C前半		
120	55	1458	II区深	肥前陶器	刷毛目	-	碗	※ 9.8	7.3	4.3	18C後半		
121	-	818	II区	瀬戸村	陶器	灰釉	碗	-	-	-	18～19C		
122	24	1304	SD-15	関西系	陶器	-	碗	9.1	6.1	3.05	18C		
123	17	1263	SD-04	関西系	陶器	-	碗	9.8	-	-	18C		
124	66	3793	SK-35	堺・明石	焼繪	陶器	擂鉢	※ 37.0	-	-	18C後半		
125	71	3806	SK-54	越前	陶器	中型	甕	※ 45.4	-	-	18C末～19C前		
126	-	2169	IV区	瀬戸村	陶器	灰釉	水甕	-	-	-	18～19C		
127	72	45	SK-49	越前	陶器	中型	甕	42.8	51.7	17.5	18C末～19C前		
128	13	3645	P-160	備前か	陶器	灯明	皿	※ 11.0	-	-	18C		
129	29	1406	SX-07	石州・出雲か	緑色釉	緑灰色釉	碗	※ 9.6	7.2	※ 5.6	19C後半	1407ほか	
130	-	2830	IV区	布志名	陶器	緑灰色釉	碗	-	-	-	19C	936	
131	60	3397	IV区	越前	陶器	-	壺	※ 7.3	-	-	18C～19C	ねじたて技法	
132	37	998	II区A1G	肥前磁器	染付	-	碗	9.8	5.5	3.9	1690～1730年代		
133	40	1663	IV区D-5G	肥前磁器	染付	網目文	碗	-	-	※ 4.8	1690～1740年代		
134	32	2769	153深	肥前磁器	染付	コニャク印版	杯	※ 7.15	※ 5.18	3.5	1690～1730年代	火を受ける	
135	47	1699	IV区D-5G	肥前磁器	染付	型打成形	口禿皿	※ 15.4	4.2	9.6	1680～1730年代	火を受ける	
136	50	1658	IV区D-5G	肥前磁器	染付	-	皿	18.2	3.2	11.85	1670～1700年代	1659ほか	
137	-	980	P-17	肥前磁器	染付	-	筆管	-	-	-	17C後半		
138	4	3506	SK-84	肥前磁器	染付	-	碗	※ 9.8	-	-	17C末～18C前半		
139	39	3708	133深	肥前磁器	染付	網目文	碗	※ 9.8	-	-	18C前半		
140	58	3119	144深	波佐見窯	染付	陶胎	碗	※ 9.65	-	-	18C前半		
141	35	3098	141深	肥前磁器	染付	-	杯	※ 6.8	-	-	18C前半か		
142	41	3855	III区A6G	肥前磁器	染付	-	皿	※ 9.8	-	-	18C前半頃		
143	42	2052	III区深	肥前磁器	染付	輪花	皿	12.2	-	-	18C前半頃	2054ほか	
144	44	3673	SK-55	肥前磁器	染付	コニャク印版	皿	-	-	※ 8.0	18C前半		
145	49	3735	SD-36	肥前磁器	染付	コニャク印版	皿	-	-	※ 7.1	18C前半か		
146	1	2723	134深	肥前磁器	染付	-	碗	※ 8.5	5.7	3.4	18C後半頃		
147	36	1034	II区A2G	肥前系磁器	染付	小丸	碗	8.2	4.6	3.3	1780～1810年代		
148	2	3760	143深	肥前系磁器	染付	小丸	碗	8.4	5.3	3.5	1780～1810年代	火を受ける	
149	28	2295	SX-07	肥前磁器	染付	雲龍文	蓋	9.2	2.7	3.5	1780～1820年代		
150	7	824	P-33	肥前磁器	染付	草花文	蓋か瓶	-	-	※ 5.0	18C後半	1023ほか	
151	34	3643	SK-74	肥前磁器	染付	梅文か	碗	※ 7.9	-	-	17C後半～18C		
152	45	2791	SK-49	肥前磁器	染付	五弁花文	皿	-	-	※ 9.0	1740～1760年代	角福	
153	43	3064	SK-67	肥前磁器	染付	花文	皿	※ 12.8	-	-	18C後半～19C初		
154	51	3735	SD-36	肥前磁器	青磁	-	火入か	-	-	※ 5.4	18C		
155	46	1151	II区A2G	肥前磁器	染付	草花文	鉢	※ 14.0	5.6	※ 8.5	18C後半		
156	5	1030	II区A1G	肥前系磁器	染付	広東	碗	※ 11.2	5.7	※ 6.3	1780～1840年代	見込島文	
157	6	2171	IV区	肥前磁器か	染付	広東	碗	※ 11.3	6.25	※ 7.0	1780～1840年代		
158	23	1005	SD-15	肥前磁器	染付	筒形	碗	-	-	3.7	1780～1810年代		
159	9	3749	143深	肥前磁器	染付	絹唐草文	蓋	※ 12.1	-	-	1800～1860年代		
160	48	3189	SD-27	肥前磁器	染付	-	皿	-	-	-	18～19Cか		
161	33	1483	SD-19	中国・清朝	染付	コバルト釉	碗	※ 9.2	4.8	3.5	18～19C前半		

凡例

報告番号は、鳥取第20次における番号を指す。無いものは筆者が作成した。

報告番号に付す法量の数値は報告書から転記し、ほかは筆者が計測した。※は推定復元値、△は残存値を示す。

実測図の断面は須恵器が黒墨で、瓦質土器、陶磁器はそのまま拘絶した。

鳥取市域の城郭～陣城・景石城・鹿野城など

西 尾 孝 昌

昨年から、鳥取城・秀吉の陣城群の調査と並行して、市域の近世城郭である高石垣をもつ景石城・鹿野城等の縄張り調査を実施している。調査担当は、鳥取市教育委員会文化財課(坂田邦彦)と筆者である。

今回は、秀吉の陣城群の内未調査であった中ノ郷中学校北側の陣城・八幡山の陣城・飛田城と景石城・鹿野城の縄張り的特徴について報告する。なお、天正9年(1581)段階で毛利方の付城であった大崎城についても検討する。

1. 秀吉の陣城群

(1) 八幡山の陣城(伝・三好信吉の陣所跡)(第1図)

城は八幡池の北東、伝羽柴秀次の陣と約250mほど離れた尾根続き、標高56.1mに所在する。

主郭1は方形土壘開みで、東西約13m・南北約20mを測る。南辺は土壘が破壊されているようである。土壘の規模は、北側で幅4.5m・高さ0.6m、西側で幅4m・高さ0.7m、東側で幅3.5m・高さ0.6mを測る。主郭の北東隅に、幅約4.5mを測る外折形虎口を構築している。

主郭1の北側に東西約19m・南北約11mを測る平坦面2があるが、現在2基のテレビ塔が建っており、城郭の曲輪であったかどうかは不明である。

この陣城は、現在確認されている秀吉の陣城群の中で、外折形虎口を有する唯一の遺構である。指揮の間にある伝羽柴秀次の陣にも、折形虎口は構築されていない。

(2) 中ノ郷中学校北側の陣城(第2図)

城は、中ノ郷中学校(浜坂1丁目)北側の丘陵、標高94.8mの砂丘上に所在する。山裾の中ノ郷中学校グラウンドとの比高は、約90mを測る。城域は東西約110m、南北約100mを測る。

標高94.8mに位置する曲輪1と曲輪2で主郭部を構成している。曲輪1は20×13m、曲輪2は22×17mを測り、曲輪中程の仕切り土壘は幅4m・高さ0.5~0.7mを測る。

曲輪2の北東隅から東側には幅4m・高さ0.3~0.5mの土壘が延びている。曲輪3は22×24mを測り、北東隅に幅約1.5mの平虎口を設けている。曲輪3と曲輪2との段差は約5~6mを測る。曲輪5は45×23mほどあり、南東隅に虎口を構築しているようである。曲輪3と曲輪5との段差はわずかで0.5mもない。曲輪7はの切岸は明確ではないが、北側の土壘は規模が大きく幅7m・高さ0.6m・長さ32mを測る。曲輪5と曲輪7との間の仕切り土壘は幅9mほどある。

また主郭部北側約5m下には、2段の帯曲輪を構築している。曲輪4は幅7m、曲輪8は幅6mを測る。曲輪4・曲輪8の北側には、堀切は構築されていない。

城は主郭部を幅広い帯曲輪で囲繞し、帯曲輪の両端(東側と西側)に土壘を設けて守備を固めている点に特徴がある。城は南側(千代川)方向を向いており、土壘や虎口の使い方からすると在地系の城郭ではなく、秀吉の鳥取城攻めの陣城群の一つとみられる。

(3) 飛田城(鹿野町河内)(第3図)

飛田城は河内川右岸、鹿野町河内(上条)集落東側、東から西に延びる尾根先端部の標高約310mに位置する。集落との比高は約90mを測る。

飛田城はほぼ3郭からなり、それぞれに土壘と堀を方形に巡らせているのが特徴的である。城は背後(東側)の尾根筋からの攻撃に対して堀と土壘を構築して対処し、前面(西側)の城道からの攻撃には曲輪1と曲

輪3で攻撃して守備する繩張りとなっている。

曲輪1は東西約33m・南北約42mを測り、曲輪の北東・東・南・南西側をコの字状の土塁と堀が取り囲んでいる。土塁は幅約4.5~5.5m・高さ1.5~2mを測り、堀は幅2.5~4.5mを測る。曲輪1は南側は3段程に分かれているが、北側は緩斜面となっている。虎口は谷側(西側)ではなく、北東隅の曲輪2をめぐる堀との間に設けられているようである。また曲輪1の南西側には、小規模な堀切と曲輪4(10×6m)を構築している。

曲輪2は東西約16m・南北約25mを測り、北側から東側にかけて鉤状の土塁と堀を巡らせている。土塁は幅約6m・高さ1.5~2mを測り、堀は幅約6mを測る。また曲輪の南側には、土塁間に入る幅約4mの平虎口を構築している。

曲輪2の約4m下には曲輪3が設けられており、北側から西側にかけて土塁と鉤状の堀が巡らされている。土塁は小規模で幅約1.5~2m・高さ0.6mを測り、堀は幅4~4.5mを測る。

飛田城は3郭とも方形の土塁と堀で囲繞されており、鳥取城周辺の秀吉の陣城群とは繩張りを異にする。しかし在地系の繩張りではなく、明らかに繩張りの手法で新規築城した陣城であることは間違いない。飛田城の対岸の高所(標高466m)には7条からなる畝状堅堀をもつ在地系の荒神山城があるが、その繩張りは飛田城とは大きく異なる([鳥取県中世城館分布調査報告書第1集(因幡編)])。

飛田城は位置的に美作国方面から鹿野に入るルートに所在し、秀吉が天正8年5月上旬鹿野城を攻略した時(羽柴秀吉書状「利生護国寺文書」)の陣城と思われる。

(4) 西桂見の土塁(第4図)

桂見の土塁については、既に『鳥取城調査研究年報』(第4号)で美術館建設予定地の北側(「北側土塁」)について調査報告している。今回はその南側(「南側土塁」)について調査成果を報告する。

南側土塁は、天文館跡から南側の尾根筋に約1.5kmほど続いている。その詳細を報告することは出来ないが、各地点の主要な遺構を紹介する。

<A地点>

天文館跡の北側尾根には土塁は構築されていないので、北側土塁とは連続していなかったようである。天文館跡地からB地点までの土塁は、幅4.5m・高さ1.2~1.3mを測る。

<B地点>

標高76.8mのB地点は北側に土塁をもつ曲輪(9×20m)となっており、その東下斜面に4条の土塁が伸びている。

<C地点>

C地点には2段の曲輪が設けられており、下段の曲輪の西側には3条の土塁が構築されている。土塁の間は幅4~6mの堅堀状を呈しており、西側を意識した虎口ではなかろうか。上段の曲輪から「風の広場」までは直線的な土塁(幅4m・高さ1m)が続く。

<D地点>

D地点は「風の広場」と称する展望台が設置されている。展望台設置以前の地形は不明であるが、現状では尾根筋と谷筋に土塁が構築されており、丁度緩斜面を開いて込むような形を呈している。軍勢の駐屯地として利用されたのかも知れない。

<E地点>

一部に曲輪状の箇所があるが、概ね尾根筋にそって土塁(幅3~4m・高さ0.6~1m)が連続している。

<F地点>

F地点には、3段の曲輪や土塁、堅堀などがみられる。中程の広い曲輪は東西23m・南北33mを測り、西側斜面に土塁と堅堀(幅5m)、南斜面に約40mを測る土塁(幅3.6m)を設けている。下段の曲輪は18×16mを測り、西側に2条の土塁を構築している。上段の曲輪は13×19mを測り、東縁に土塁(幅2.5m・高さ0.5m)を設けている。

<G地点>

G地点には尾根筋にそって、一部に鉤状の土壘をもつ3段ほどの曲輪が設けられている。

＜H地点＞

H地点には2段の曲輪と土壘・堅堀が構築されている。上段の曲輪は12×35mを測り、北西縁に土壘、南東斜面に2条の堅堀(幅4~6m・長さ35~39m)を設けている。

下段の曲輪は11×32mを測り北側に土壘(幅3~4m・高さ1.5m)、南側に長い堅堀(幅6m・長さ40m)、北西尾根に長い土壘(長さ43m)を配置している。

H地点の南側には大きな谷が入っており、「南側土壘」はここで終わるようである。

「南側土壘」は「北側土壘」とは異なり、尾根筋に土壘線の他、広い曲輪や土壘・堅堀などをを使った虎口空間が付随している。特に虎口らしい遺構はC地点とF地点に顕著にみられるが、何れも西側に向いているように思える。

西桂見の土壘(南側・北側土壘)は、どうも尾根筋に沿って湖山池から南側に、ほぼ連続して構築されているようである。筆者は『鳥取城調査研究年報』(第4号)で、「鹿野方面から繰り出しある毛利勢を食い止めるために、秀吉が構築したもの」と考えたが、その見解は「南側土壘」の調査後も変わっていない。

管見では、西桂見の土壘を秀吉が構築したことを裏付ける史料はない。しかし『信長公記』には、天正9年6月25日の項に「羽柴筑前、彼の山(帝釈山「太閤ヶ平」)へ取り上り、是れより見、下墨み、即ち、この山を大將軍(=信長)の居城に拵え」「(芸州からの)後巻の用心に、後陣の方にも堀をほり、堀・尺をつけ、馬を乗りますは候へども、射越の矢にあたらぬ如くに、まわれば二里が間、前後に築地高々とつかせ、其の内に陣屋を町屋作りに作らせ、夜は手前手前に篝火たかせ、白中の如くにして、廻番丈夫に申しつけ」と記され、また同8月13日の項には「芸州より、毛利・吉川・小早川、後巻として罷り出づべきの風説これあり。」「今度、毛利家人数後巻として、罷り出づるに付いては、信長公御馬を出され、東国・西国の人数、虜(はだへ)を会せ、御一戦を遂げられ、悉く討ち果たし、本朝憲りなく御心一つに任せらるべき旨(の)上意にて、」とも記されている。天正9年段階では、秀吉が「太閤ヶ平」を信長本陣として普請し、周到に鳥取城を包囲させ、鳥取城の救援のために毛利勢が繰り出した場合には、信長自ら出陣し、毛利軍を完全に殲滅させようとしていたことが分かる。そのために後陣の方にも堀を掘らせ「まわれば二里が間」(二里四方)に築地(土壘)を築かせたようである。身勝手な見方かも知れないが、鳥取から2里四方となれば当然桂見付近に到達し、そこに築地(土壘)を築かせたものと解釈してはいかがであろうか。そのように考えると、西桂見の土壘は秀吉の勢力範囲の西縁に築城されたことになる。

文献的解釈はともかく、湖山池の南側の尾根に数キロの土壘線を構築することは、織田勢が毛利の大軍を迎へ撃ち、総力戦を開戦するためには不可欠の防衛ラインであったと理解しておきたい。

2. 毛利氏の陣城群

＜大崎城＞(気高町奥沢見)(第5図)

天正9年段階の秀吉の因幡攻めに対する毛利氏の付城(陣城)としては、勝山城(気高町勝見)・泊城(湯梨浜町園)・大崎城(気高町奥沢見)がよく知られている。天正9年6月鳥取城に籠城していた吉川経家が、今後の戦況の見通しを述べている中に、秀吉が因幡に進攻すると、まず勝山城・泊城・大崎城などの付城を攻撃するであろう(「勝山・泊・大崎其の外の付城あまた一着すべく候」)こと予想している(吉川経家書状『石見吉川家文書』)。現に、秀吉方の細川藤孝の水軍(松井康之の水軍)は9月16日泊城を攻撃した。その時泊港には毛利方の船団64隻が停泊しており、毛利方の多数の軍勢が討ち取られ、その船団は破壊された。この救援に大崎城から軍勢を派遣したが松井水軍に敗れ、大崎城の山下は焼き払われている(織田信長黒印状『細川家文書』)。

大崎城は気高町奥沢見の日本海に面した丘陵、標高93.2mに所在する。城は土壘開みの主郭から2方向に延びる尾根に連郭式に曲輪を配置し、通路空間でもある南側に長い土壘と堅堀を構築した網張りである。また、海側(北側)の斜面に細長い曲輪を多数設けているのも特徴的である。

主郭1は東西約28m・南北約20mを測り、土壘に囲繞されている。土壘は南側が規模が大きく、幅約4~7m・

高さ約0.5~1.5mを測り、西南隅は櫓台であったかも知れない。西・北・東側の土塁は、幅約3~4m・高さ約0.5~0.7mを測る。虎口は南西隅と東側(幅約2m)に設けている。

主郭1の南下約4.5mには幅3mの帯曲輪を構築し、北側の尾根には幅の狭い曲輪群を配置している。

主郭1の東側には、10段程の切岸のしっかりした曲輪群を配置している。曲輪2は20×18mを測り、北側に土塁を構築している。曲輪3は14×14mを測り、曲輪2との段差は約2.5mある。曲輪4は15×11mあり、切岸に石積(約3m)がみられる。曲輪5は16×11mを測る。曲輪6は17×13mを測り、曲輪5との段差は約3mである。曲輪7は14×11mを測り、曲輪6との段差は約4mを測る。曲輪8は20×11mを測り、曲輪7との段差は約6mを測る。曲輪8と主郭1との間には幅3~3.5mを測る堅堀状の通路とそれに沿って幅約3~5m・高さ約0.5~0.7mを測る土塁が設けられている。また曲輪8の南側には、現状で幅6mの虎口を構築している。

主尾根の曲輪群の北側(海側)には細長い曲輪群が連続している。主郭1の北側尾根の曲輪群と同じ様相をしており、海からの物資運搬のための曲輪群であろうか。

史料的にいえば、このような遺構全体が天正9年段階のものであろう。しかし、曲輪2~8の曲輪群は小規模で段差も低く、新規築城された付城とは考えにくい。新しい様相をしている縄張りは、主郭1の土塁と2ヶ所の虎口、城の南側に設けた堅堀と土塁をセットにした通路と虎口である。また、土塁の使い方は鳥取城周辺の織田系陣城とは異なるようである。従って、大崎城は織田勢との抗争の中で、在地勢力の城を毛利勢が土塁と堅堀などによって改修したものと推察される。

ところで、但馬にも毛利方が新規築城した賀鷲城がある(第6図)。賀鷲城は日本海に突き出た陸島に立地しており、竹野地域では特異な縄張りを有している。城はほぼ単郭(東西25m・南北44m)で、土塁(幅4~5.5m・高さ1~1.5m)が取り巻き、北側に堀切・堅堀・南側に虎口を構築している。

天正8年(1580)5月吉川元春が都野越中守・弥四郎父子に送った書状の中に、「鹿島の儀、普請彼は相調え油断無く候由、肝心此の事に候」とあり、鹿島(城)が竹野に於ける毛利方の拠点(陣城)として築城されている。都野父子は天正7年(1579)頃から吉川元春の名代として但馬に出兵(常駐)し、奈佐日本助・垣屋豊統らと共に対織田作戦を展開していた。吉川元春は織田勢の攻勢に対して、竹野賀鷲城を但馬奪回作戦の橋頭堡としていたようである。

因幡・伯耆などの日本海側の城の縄張りを検討した訳ではないが、但馬の事例等から考えると、大崎城の土塁をもつ縄張りは吉川勢による改修とみることができよう。今後、因幡・伯耆方面の「毛利の付城」とされている城の縄張りの検討が必要である。

なお、勝山城は戦国期以前の城を畝状堅堀によって改修・補強した縄張りをもつ。この勝山城の場合は、毛利勢によって、畝状堅堀による付城としての改修がなされたものと思われる。勝山城は大崎城とは大きく縄張りが異なることを考えれば、毛利系の陣城は土塁と畝状堅堀による改修という、2系統があるのかも知れない。

3. 高石垣をもつ近世城郭

因幡における高石垣をもつ近世城郭については、すでに吉田浅雄氏や角田誠氏らの縄張り研究がある。また鹿野城については、昭和56年(1981)の段階で詳細な研究報告(『鹿野城跡調査概報』(鹿野町教育委員会・鹿野城跡調査委員会)がなされている。ここではそれらを参考にしながら、縄張り調査の報告をする。

(1) 景石城・子持松ノ砦(所在:用瀬町用瀬)(第7図・折込み)

景石城は千代川右岸、用瀬集落東側、標高320m地点に景石城、標高325m地点に子持松ノ城が所在する。

城は南北朝期の『太平記』にみえ、延文年間(1356~61)播磨の赤松世貞・同則祐が因幡の景石・揉尾・塔尾城(智頭町)などを攻略している。また室町期には、因幡守護山名氏に属する国人(用瀬氏)の城であったらしい。景石城は、天正8年羽柴秀吉の第一次因幡攻めの時に攻略され、秀吉は磯部兵部大輔(豊直)を守備させた。磯部氏は但馬の朝来郡磯部谷の国人で、秀吉の但馬進攻の時その麾下に入った人物である。その後景石城は毛利方の山名豈國に奪回され、同年10月には吉川氏の家臣が在番していたようである(吉川元春書状「萩藩閥閱録」)。天正9年(1581)の秀吉の第二次因幡攻めの時、磯部氏は軍功をあげ、智頭郡半分を与え

られて再び景石城主となった(羽柴秀吉控書「間島文書」)。

その後、磯部氏は若桜鬼ヶ城の木下重堅との力となり、3,000石を与えられた。慶長5年(1600)の間ヶ原の戦に際して、磯部氏は木下氏と共に西軍に属したため除封となった。慶長6年(1601)家康から智頭・八東二郡を預託した山崎家盛が若桜鬼ヶ城に入部すると、その支城として家臣が配属された。元和3年(1617)の池田光政の鳥取入部によって、魔城となったという。

＜子持松ノ砦＞

標高約320mに所在する主郭1は東西15m・南北10mを測り、その背後(南東側)に堀切(土橋)・堅堀を構築している。堀切は幅約10m・深さ5mあり、堅堀は幅3m・長さ10~13mを測る。また、主郭南側の小曲輪4は9×4mを測る。

主郭1の北側の尾根には、堀切・堅堀と4段程の曲輪を配置している。堀切は幅約10m・深さ約5mあり、堅堀は幅約3m・長さ8~10mを測る。曲輪2は7×24mを測り、曲輪3は5.5×7mを測る。曲輪3の東西斜面の堅堀は、幅約2.5~3m・長さ9~11mを測る。

主郭1の西側尾根には、堀切・堅堀と4段程の曲輪を設けている。堀切は幅10m・深さ約5mあり、堅堀は幅4~4.5m・長さ19~23mを測る。また、主郭北西斜面の堅堀は幅4m・長さ15mを測る。曲輪5は7×8mあり、低い土塁が堀切側に鉤状に構築されている。曲輪6は8×6mを測る小曲輪で、曲輪5との段差は約2mしかない。尾根鞍部の曲輪7は5×11mを測る。曲輪8は7×11mの小曲輪である。

城は、主郭の背後を堀切(土橋)・堅堀で遮断し、主郭から二方向に延びる尾根に小曲輪群を配置し、さらに堀切・堅堀や畠状堅堀などを構築して補強・改修したものである。改修時期は戦国末期で、その起源は南北朝期から室町期であろう。織豊期の改修はみられない。

＜景石城＞

城は標高325mに位置する主郭周辺に高石垣を構築し、そこから四方向に延びる尾根に小曲輪群を配置した縄張りである。

主郭1は東西32m・南北10mを測り、南側と東側に平虎口を設けている。石垣は曲輪を全周していたものと思われるが、北側から西側の石垣(高さ約4~4.5m)は破壊されている。北西隅の張出部には櫓台があったであろう。東側の石垣は高さ1.2mを測る。

曲輪2はほぼ台形で、東西11m・南北13mを測る。東側の石垣は崩れているが、石垣は全周していたものと思われ、現状で高さ4~4.5mを測る。

曲輪3は東西約13m・南北約32mを測り、北西隅と南西隅に小規模な櫓台を構築している。石垣の高さは西側で約4.5m、南東側で3.3~4mを測る。また曲輪3の東斜面に構築された曲輪4は16×9mを測り、石垣を巡らせている。

曲輪2の北東尾根には、岩盤を掘り込んだ浅い堀切・堅堀と6段程の曲輪が配置されている。曲輪群は小規模で、曲輪5は4×9m、曲輪6は5×6m、曲輪7は8×16m、曲輪8は11×24mを測るに過ぎない。

主郭1北側の尾根には数段の小曲輪が認められるが、大きいもので7×6mである。また曲輪3の南尾根にも4段の小曲輪があるが、最大で7×6mを測る。

曲輪3の北西尾根には9段の曲輪が確認出来、曲輪9~12は登城路を兼ねている。曲輪9は13×6mの小曲輪であるが、西側に石垣をもつ。曲輪10は7×7mほどの小曲輪である。曲輪11は17×17mを測り、石列がみられるので、当所は櫓台をもつ石垣が巡らされていたのかも知れない。曲輪12は8×19mを測る。

曲輪12から直線距離で約100mほど離れた所に、岩盤を掘り込んだ堀切・堅堀と5段程の切岸の甘い曲輪を配置している。堀切は幅6m・深さ約2m、堅堀は大規模で幅6m・長さ46mを測る。また、曲輪13は9×23m、曲輪14は16×5mを測る。

景石城の高石垣をもつ主要部は山頂の曲輪1~3で構成されているが、石垣は4~4.5mと比較的低く、隅角部の石垣も算木積とはなっておらず、直線的で反りはみられない。また、曲輪の虎口も平入りで枡形ではない。従って主要部の石垣は天正期前半、天正8~9年頃の普請と思われる。その後の改修はなかったであろう。

景石城主要部の周辺には尾根筋に小曲輪群がみられるが、これらの遺構は南北朝から室町期の様相を呈し

ている。城は戦国期末期に堀切・堅堀による若干の改修を受けており、子持松ノ城と同時期に機能していたものと思われる。その後、織豊期に山頂部を中心にして石垣による大改修がなされたものと推察される。尚、景石の石垣は破城されていると判断されるが、その時期は元和の一国一城令以降の池田光政段階と思われる。

<磯部氏居館跡>(通称「御屋敷」)

磯部氏の居館は、景石城と子持松ノ城から西側に延びる尾根に挟まれた谷部、標高約150m地点に所在する。

居館の中心部は広い曲輪1で、東西約45m・南北約56mを測る。谷側(北側)の石垣はかなり崩れているが、北西石垣は高く現状で約5mある、隅角部は算木積にはなっておらず、シノギ積のようである。曲輪1の前面(西側)には3段の石垣が構築されている。何れも建物が立つような広さではなく、曲輪2は幅5m、曲輪3は幅7m、曲輪4は幅12mを測る。石垣の高さは約2~3mを測る。曲輪4の石垣は小ぶりで、後世に積まれたものかも知れない。現状では、曲輪1~4の間に明確な虎口はみられなかった。

曲輪4の前面(西面)には幅約7mを測る通路が設けられているが、その南北に3段ずつ曲輪を構築している。西からの進入者を迎撃するための曲輪群であろう。北側の曲輪5は13×8m、曲輪6は11×6m、曲輪7は10×8mを測る。また南側の曲輪8は8×17m、曲輪9は25×21m、曲輪10は20×15mを測る。

磯部氏の居館部は大きな石を使用しているものの、石垣の積み方は稚拙であり、景石城の主要部の石垣と同時期に築城されたものと思われる。しかし、居館への通路部の小曲輪群や居館背後の尾根筋の小規模曲輪群などを勘案すれば、子持松ノ城時代の古い居館もここに所在していたことも考えられ、戦国期まで利用されていた居館部を磯部氏が石垣の居館に改修した可能性もある。

なお磯部氏時代の居館からの登城路は、居館から谷をわたり、堀切・堅堀に至る現在の登山道に繋がっているものと推察される。

(2)鹿野城(所在:鹿野町鹿野)(第8図・折込み)

鹿野城の縄張り調査は、前記「鹿野城跡調査概報」所収の「鹿野城跡遺構分布図」を活用させていただいた。山城部分の調査は遺構分布図を手直ししながら実施したが、山裾の平城部分は不十分な調査しかできていない。

<鹿野城史>

鹿野城は河内川と水谷川の合流点、鹿野町の南側、標高152mの妙見山に所在する。城域は東西約300m・南北約350mを測り、山城部分と山下の水堀に囲繞された平城部分に分かれる。主郭部と山裾との比高は約100mを測る。

鹿野城は因幡から伯耆方面へ向かう内陸の幹線道路の要衝にあり、戦国期には「因伯仕切りの城」として重要視され、合戦の舞台となった。以下、「調査概報」に依拠しながら、鹿野城史についてまとめてみよう。

鹿野城の文献的初見は天文13年(1544)初夏の頃で、出雲の尼子晴久によって攻略され、城主鹿野入道以下300余人が殺されたという。しかし、鹿野城はそれ以前にその存在が確認出来るという。

明徳2年(1391)の明徳の乱で、因幡守護山名氏家に従い京都二条大宮で戦死した志賀野八郎の名がみえる。永禄6年(1563)毛利元就の因幡侵入が開始されると、永禄7年(1564)7月元就と結んだ鳥取城主武田高信は毛利軍と伯耆衆の南條宗勝に鹿野城を攻略させた。武田高信は永禄13年(1570)毛利配下の久芳兵庫賢直に鹿野城下一保の在所を与えようとしている。

その後、毛利方の因幡防衛部隊(宇都宮家綱・湯原元綱・野村士悦・進藤豊後守ら)は天正8年5月まで鹿野城に在番した。天正元年(1573)には野村士悦が鹿野内300貫を給せられ、鹿野城の普請を行っている。

天正8年(1580)5月上旬、鹿野城は秀吉の第一次因幡進攻の際攻撃され、三吉・進藤らは鳥取城主山名豊國や森下・中村らの人質を秀吉に渡して開城している(羽柴秀吉書状「利生寺護國寺文書」)。同年夏秀吉は四人の守将(因幡の武田源五郎・丹波の赤井五郎忠家・石見の福屋彦太郎・出雲の龟井新十郎茲矩)を鹿野城に入れ、反毛利の最前線基地とした。

これに対し毛利方は鹿野に湯原元綱を派遣して攻撃させたが、鹿野城は落城せず、天正9年10月28日には、

鳥取城を攻略して羽衣石城などの救援に向かった秀吉が鹿野城に宿陣している。

鳥取城落城後、秀吉は亀井茲矩を鹿野城主として配属し、気多郡13,800石を給与した。慶長5年(1600)関ヶ原の合戦では亀井は東軍に属し、高草郡を加増されて24,200石となった。慶長14年(1609)年茲矩は家督を子政矩に譲ったが、慶長17年(1612)には加増され43,000石となった。慶長19年(1614)の大坂の陣の時には、鹿野城から1700人もの軍勢が徳川方で参戦したという。元和3年(1617)7月、政矩は石見国津和野に転封された。

その後、鹿野城には独立した城主は入部せず、池田光政の重臣日置氏、次いで寛永17年～寛文2年(1640～62)には池田輝澄(輝政の子)が居住したという。

<鹿野城の繩張り>

鹿野城は大きく、山城部分(山上の丸)と平城部分(山下の丸)に分かれる。

①山城部分

鹿野城は天守台の位置する主郭から二方向に延びる尾根に大規模な曲輪群を設け、2つの尾根に挟まれた谷部に小曲輪群を配置した繩張りである。

主郭1は方形で14×14mを測り、高さ約1.5～2mを測る石垣を巡らしている。石垣は河原石を使った野面積である。石垣の上部や隅角部などは取り崩されているようである。発掘調査によれば、5間四方(柱間約2m)の天守台であったようで、飾瓦・丸瓦・平瓦などを採集している。この天守閣は本瓦葺・入母屋造で重層の天守と考えられている。

曲輪2は主郭1を取り巻く帯曲輪(幅4～8.5m)となっており、主郭1との段差は約3mを測る。現状では、曲輪2の縁には石垣はみあたらない。発掘では、鰐瓦・平瓦・丸瓦・軒飾瓦片などが出土している。

曲輪3は10×7mを測る小曲輪であるが、斜面に石垣が張り巡らされている。やはり破城遺構と考えれば、曲輪3は小規模ではあるが石垣をもつ付櫓跡で、天守への入口を兼ねていたものと思われる。

曲輪4は18×21mを測り、曲輪3からの転石が散乱している。曲輪4は石垣普請か否かは不明であるが、表面観察では石垣ではなさそうである。

曲輪5は12×7.5mを測り、北と西斜面に整然とした石垣がみられる。石垣は高い箇所で約2mを測り、一部に角石が残存している。この曲輪は2段積の石垣であったのか、または破城によって曲輪が小さくなつたものかは判別できない。

曲輪6は36×13mを測り、西側に土塁(幅2.5～3m・高さ0.9m)を構築している。さらに北から西の斜面には石列が構築されており、西斜面には幅4m・長さ35mの堅堀を設けている。曲輪6の下段の曲輪9の裾部にはやはりかなりの転石がみられるので、曲輪6も石垣が巡らされていたかも知れない。なお、曲輪6には現在城山神社(妙見社)が鎮座しており、当時から城の鎮守として祀られていたものであろう。

曲輪7は23×33mを測り、現在貯水槽と展望台が建設されている。現状では石垣はみられないが、曲輪7の東下の曲輪13の裾部にはかなりの転石が散乱しているので、石垣が巡らされていたかも知れない。

曲輪8は6×12mを測る小曲輪で、石垣は構築されていない。

曲輪9は山城中最大規模で、東西約54m・南北約27mを測る。発掘では、南北の長軸8間×東西の長軸7.5間(但し南西隅3×2、北東隅1.5×3.5を欠く)に配列された礎石を検出している。南西・北東隅は元来から無かったものとすると、本礎石の配列は「南北6×東西6間」の礎石を本体にし、2×4.5間が西に、1.5×2.5間が北に付属する形になるという。瓦も平瓦・丸瓦・軒丸瓦(丸に一引両)・棟飾瓦(菊花紋)・軒飾瓦など多数の瓦が出土しており、曲輪9は山城部の中心的・日常的な居住区と考えられ、礎石建物は居住部分を含んだ本瓦書院建築が所在していたものと考えられている。

曲輪10は曲輪7下の急斜面に構築されており、18×5mを測る。また、その下の急斜面にも2段の小曲輪11(上段=4×4m、下段=3×3m)を設けている。

曲輪12は15×16mを測り、現在貯水槽が設けられている。現状では石垣はみられない。

曲輪13は41×13mを測り、瓦片も発見されている。曲輪の北側斜面全体に河原石の石垣列がみられ、当時は総石垣の曲輪であったものと思われる。

曲輪14は23×13mを測る曲輪で、通称「大平」と呼ばれている。現状は自然災害を伴った傾斜とみられて

いるが、曲輪14の前面(北側斜面)には帶曲輪と共に2～3段の石列がみられ、当初は段積みの高石垣が構築されていた可能性がある。稻荷神社の背後(南側)には数mにわたって高石垣が残存しており、櫓台状の石垣もみられる。山裾から曲輪14に入る虎口は不明確であるが、石垣が残存している東隅部に坂虎口を設けていたものと思われる。なお、曲輪14には西側から入る虎口も考えられよう。

曲輪14の西側には小規模曲輪群(15)が構築されているが、その性格は不明である。しかし、その曲輪群の西側尾根には2段になった石壘が構築されている。東側は高さ約2.5～3mほどの石壘であるが、西側は高さ4mを超える河原石の石壘が構築されている。この石壘は、西側の防御性を高めるために設けられたものであることは明白である。

鹿野城は石垣をもつ近世城郭であるが、曲輪配置は連続性がなく分散的であり、小曲輪群もみられるので、築城起源は南北朝期であろう。戦国期にも曲輪の拡張と共に堅堀などによる改修が加えられている。特に、主郭から流山に至る尾根鞍部の堀切・堅堀や曲輪6西側の堅堀などによる改修は戦国期であろう。また流山の尾根筋にも数条の堀切や堅堀が確認出来、流山も南北朝期から戦国期まで城郭として利用されていたようである。

鹿野城は、石垣の算木積が未完成、石垣の反りがみられない、曲輪の虎口が枡形ではなく平入りであること等を勘案すると、天正期後半の亀井茲矩による築城と思われる。また、曲輪・石壘などが全体的に破城されていることは間違いないが、その時期は元和の一国一城令後の池田光政時代と思われる。

尚、御殿風の書院造建物遺構や天守台遺構などの出土に伴う遺物などからは、山上を居住空間として利用していた可能性があり、今後検討をしていく必要があろう。

②平城部分

平城部分は現状では、鹿野中学校グラウンドとなっている通称「本丸」と鹿野中学校校舎となっている通称「二の丸」からなっている。

本丸は、南側の薬研堀から北側の稻荷神社の辺りまで内堀が巡らされている。本丸には南側と北側を防御する2つ大規模な石壘が構築されており、破城の跡が明確に分かる。石壘の形状から、南端の石壘には多聞櫓(「南櫓」)、北西端の石壘は隅櫓と多聞櫓(「北櫓」)が構築されていたものと思われる。またその直下に本丸への虎口が想定され、南櫓の東側と北櫓の山裾に虎口(城門)があったであろう。本丸の大手は北東側、二の丸へ通じる所に所在していたものと思われ、現状から考えると、内枡形の城門が想定出来る。

二の丸も堀に囲まれており、所謂馬出曲輪(角馬出)となっている。二の丸の西端には大きな土壘が残存しており、二の丸の縁全体に土壘が巡らされていたものであろう。二の丸の大手虎口は、曲輪の形状から判断して東側に構築されていたものと思われる。また、搦手虎口は西側の土壘の南側に構築されていたであろう。両虎口には土橋と城門がもうけられていたものと推察される。

本丸に馬出曲輪が取り付く構造は関東地方や東海地方に集中し、西日本には殆どみられない。馬出をもつ城は、弘前城(青森県)・米沢城(山形県)・土浦城(茨城県)・高崎城(群馬県)・川越城(埼玉県)・村上城(新潟県)・大垣城(岐阜県)・広島城(広島県)など多数あったが、いずれも明治の廃城後取り壊され、現存例は佐倉城(千葉県)・名古屋城(愛知県)・篠山城(兵庫県)などわずかであるという(三浦正幸『城のつくり方図典』小学館)。馬出は丸馬出と角馬出の二種類あるが、佐倉城・名古屋城・篠山城は何れも角馬出である。名古屋城の場合は本丸の内枡形虎口に馬出が取り付き、篠山城の場合は三の丸の内枡形虎口に馬出が取り付いている。馬出は曲輪の防御性を一段と高めるために導入された施設で、名古屋城では慶長15年(1610)、篠山城では慶長14年(1609)、佐倉城の場合は慶長16年(1611)頃築造されている。

鹿野城の場合は本丸に角馬出(二の丸)が取り付く構造と推察され、上記馬出の事例からすると、平城の築城時期は慶長期後半となろう。しかし、「王倉城図」(『因州記』所収、1861年)では二の丸から本丸の中程に入る大手道ではなく、二の丸の両端から本丸に入る構造となっている。今後検討を要する問題である。

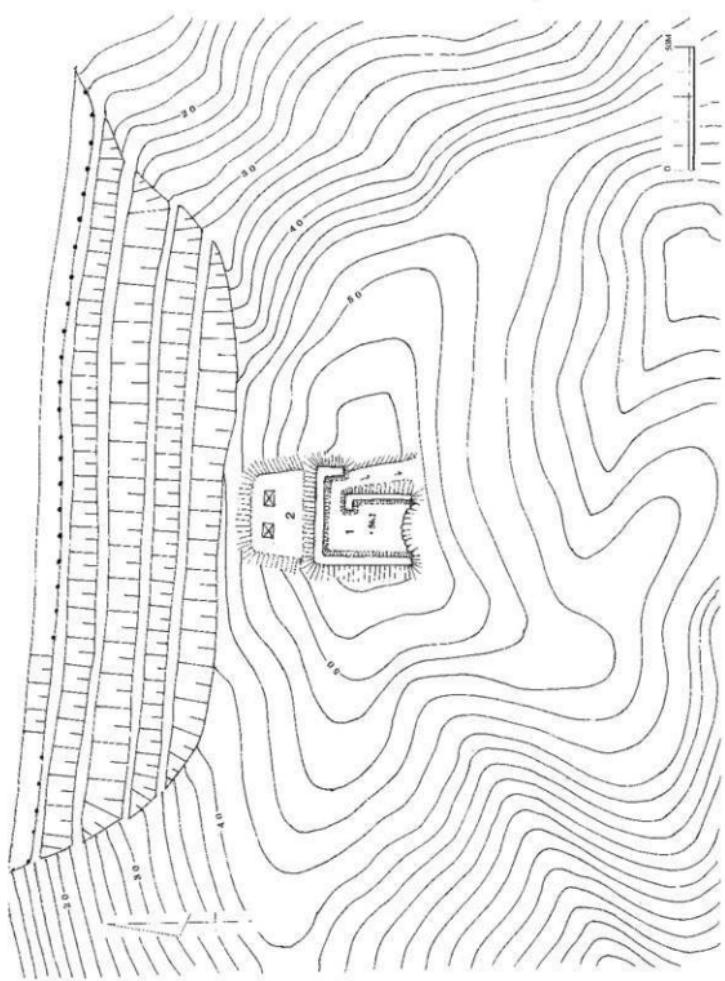
ところで、鹿野城には慶長17年(1589)の「亀井家分限帳」に「御西丸様」とあり、西の丸が存在したようである。この西の丸について『調査概報』では、「池田石入公こと輝澄が隠棲した現在の光輪寺一帯」を想定している。西の丸に堀を巡らせていたかどうかは不明である。

なお、山下の平城部分も石垣全体が破城されており(正保元年の破城とされている)、山城部分の破城遺構

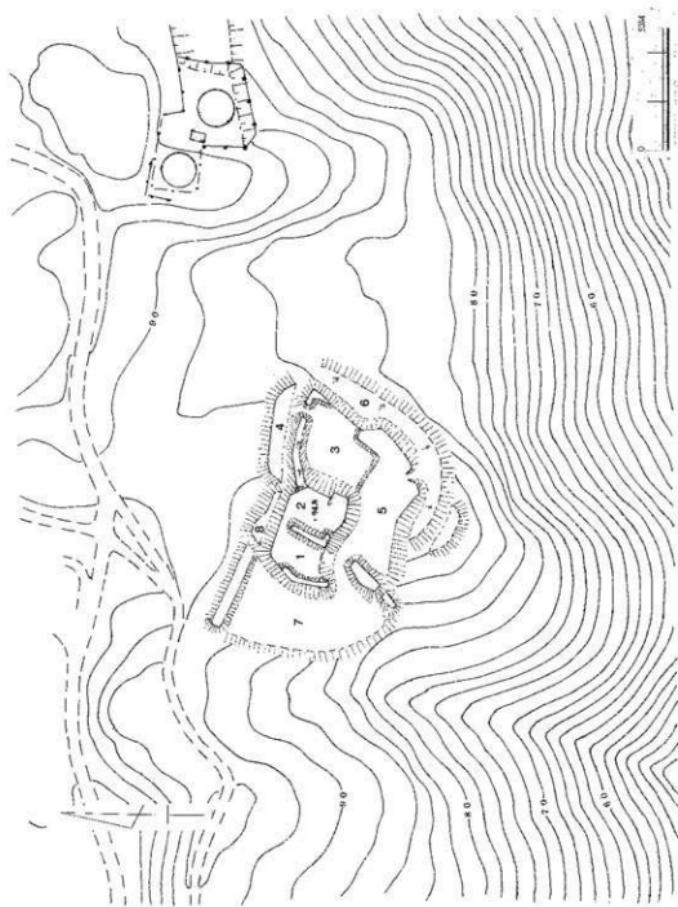
と共にその実相を究明していくことによって、鹿野城の実態解明が進捗していくものと思われる。

【参考文献】

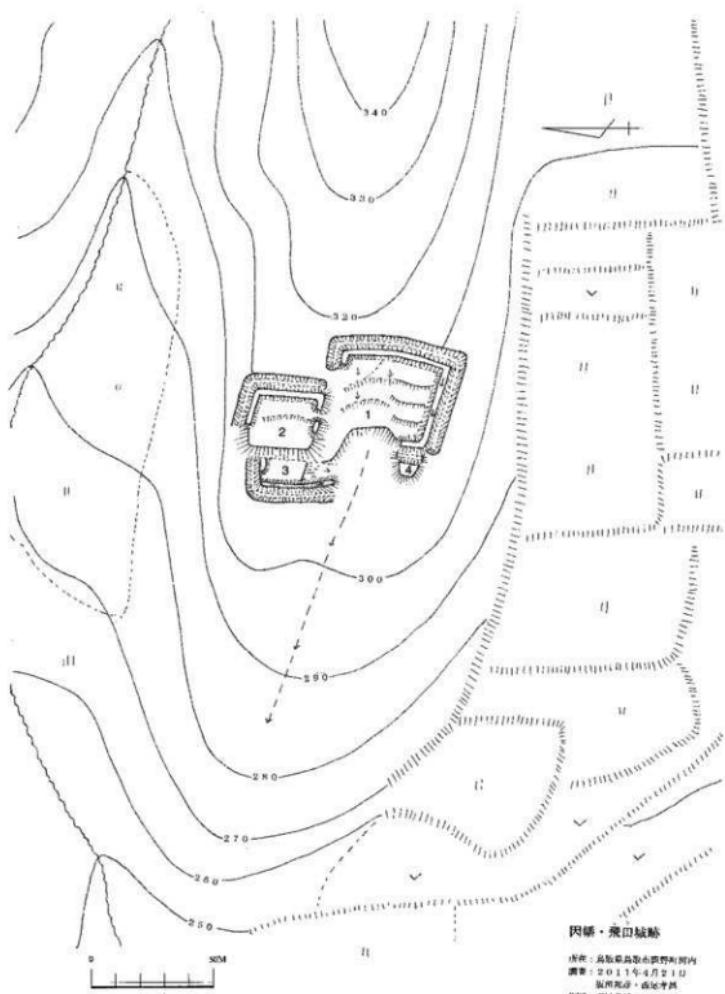
1. 「龍野城跡調査概報」鹿野町教育委員会・鹿野城跡調査委員会 1981年
2. 「日本城郭体系14(鳥取・島根・山口)」新人物往来社 1980年
3. 「鳥取県の地名」(日本歴史地名体系32)平凡社 1992年
4. 「鳥取県中世城館分布調査報告書・第1集(因幡編)」鳥取県文化財保存協会 2002年
5. 「豊岡市の城郭集成Ⅰ」(竹野町・城崎町・旧豊岡市)豊岡市教育委員会 2012年
6. 「因幡若桜鬼ヶ城」城郭談話会 2000年
7. 三浦正幸『城のつくり方図典』小学館 2005年
8. 桑田忠親『改訂信長公記』新人物往来社 1989年
9. 「織田vs毛利—鳥取をめぐる攻防ー」鳥取県 2007年
10. 「天正九年鳥取城をめぐる戦い」鳥取歴史博物館 2005年
11. 「鳥取城調査研究年報」(第5号)鳥取市教育委員会 2012年
12. 「鳥取城調査研究年報」(第4号)鳥取市教育委員会 2011年



第1図 八幡山の陣城（伝・三好信吉陣所跡）(1/2000)

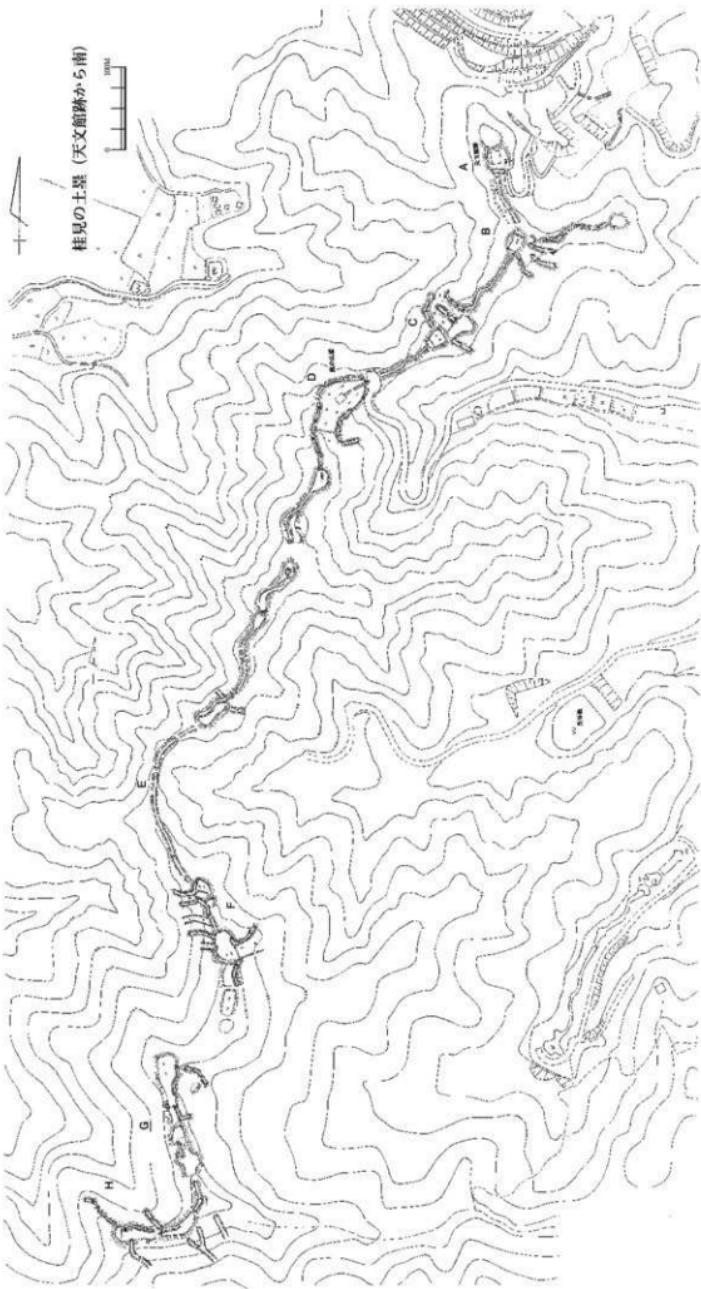


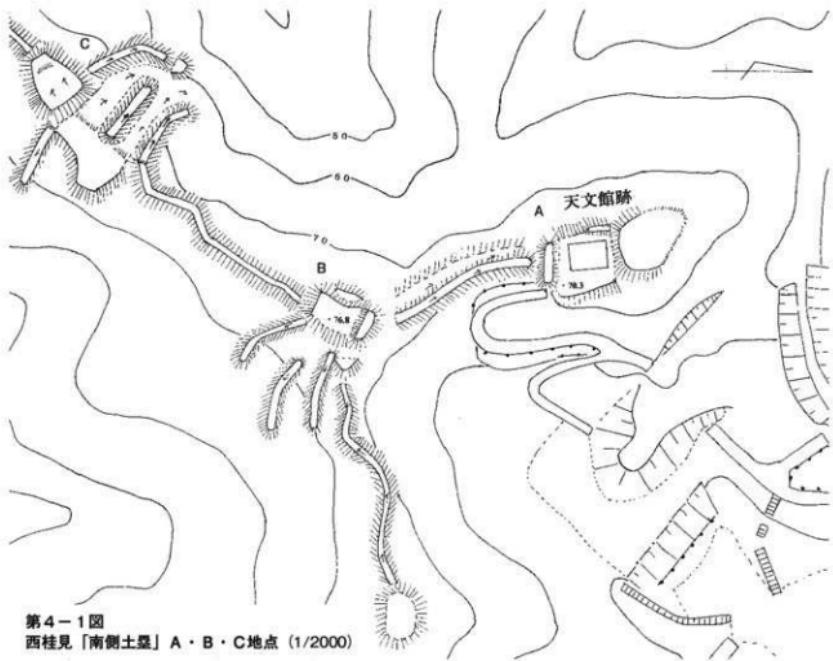
第2図 中ノ郷中学校北側の陣城 (1/2000)



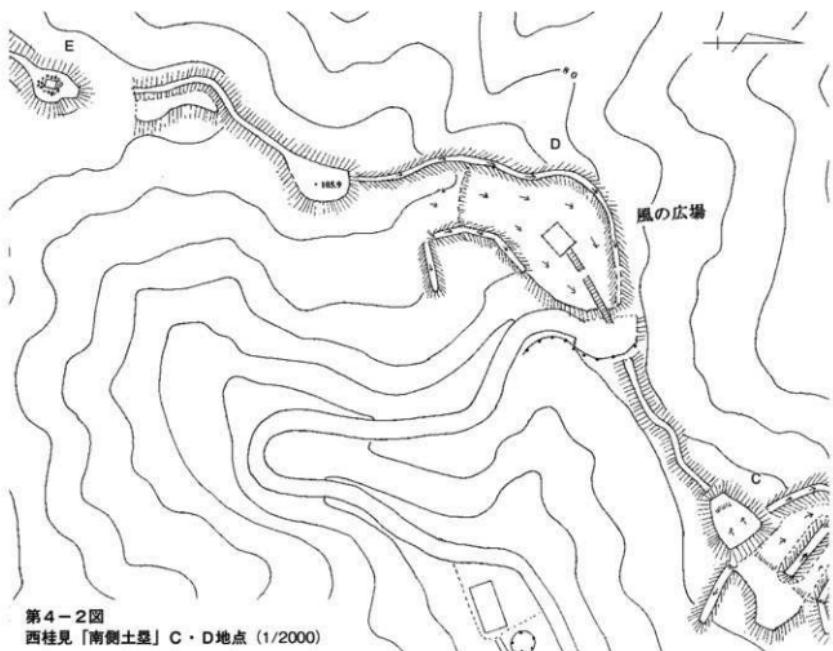
第3図 因幡・^飛田城跡 (1/2000)

第4図 西桂見「南側土塁」全体図

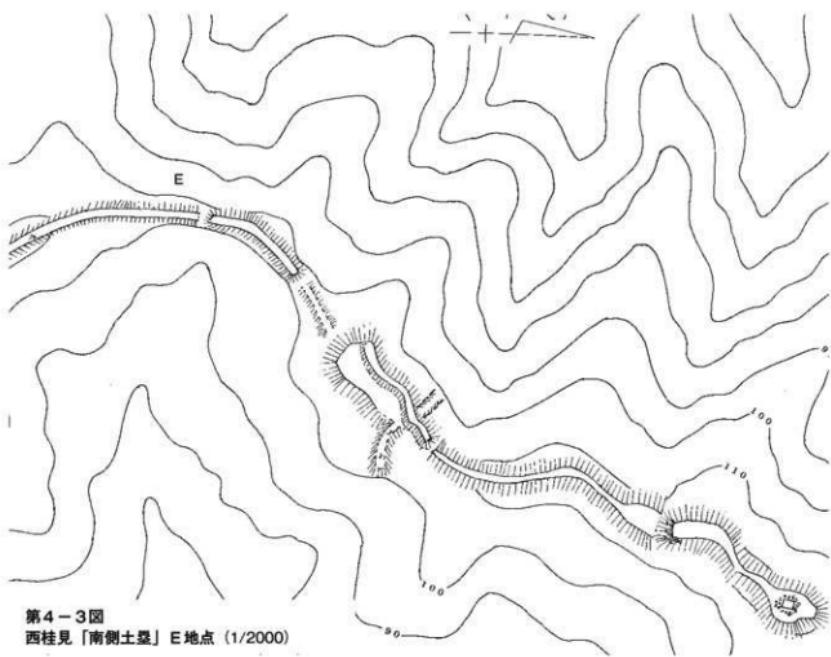




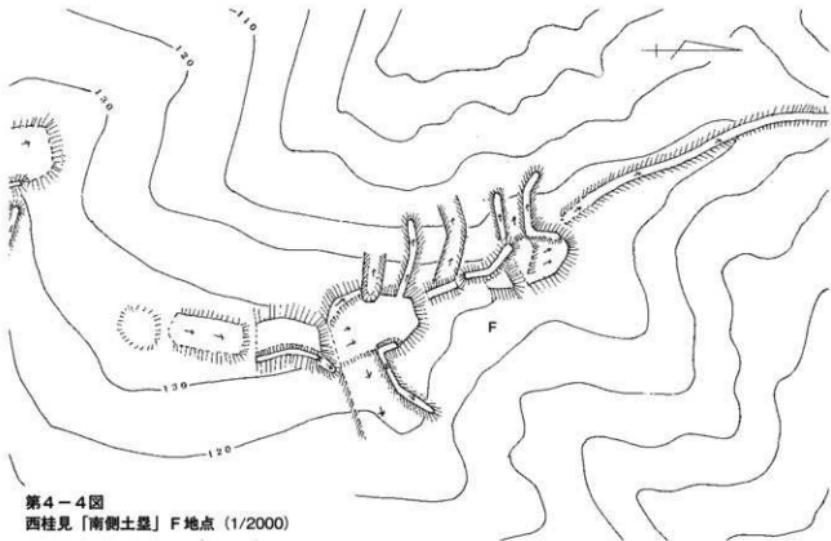
第4-1図
西柱見「南側土塁」A・B・C地点 (1/2000)



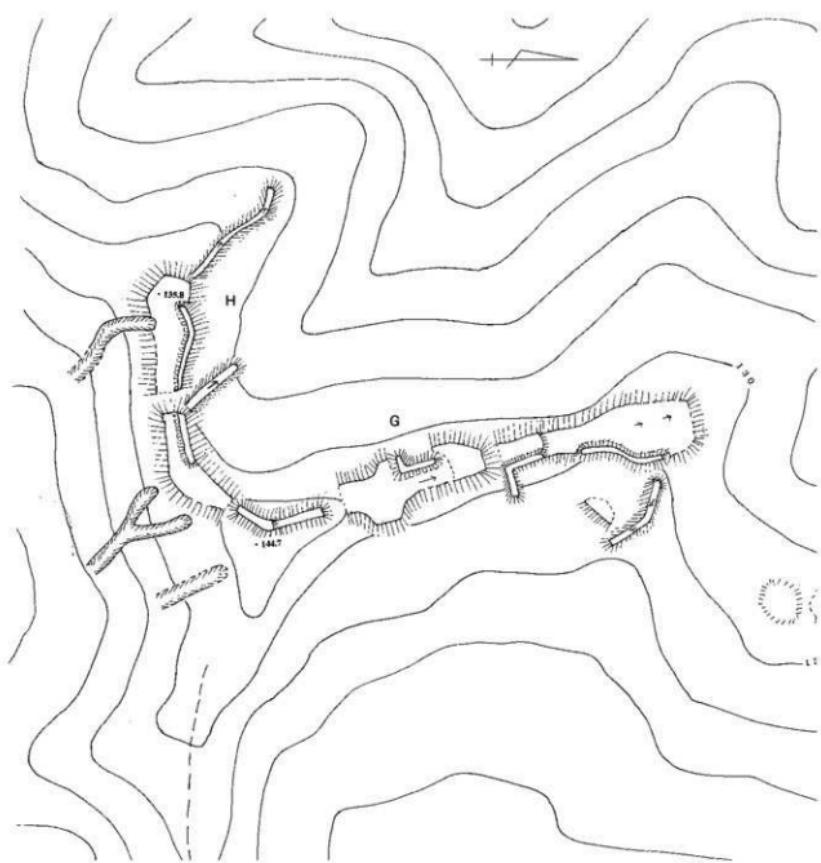
第4-2図
西柱見「南側土塁」C・D地点 (1/2000)



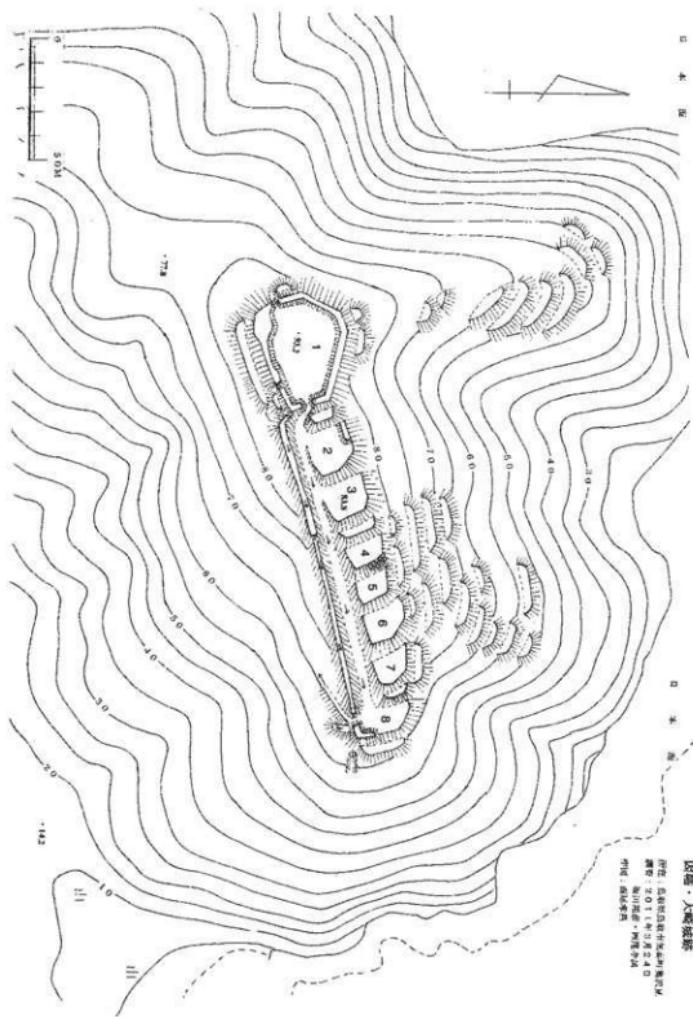
第4-3図
西桂見「南側土壠」E地点 (1/2000)



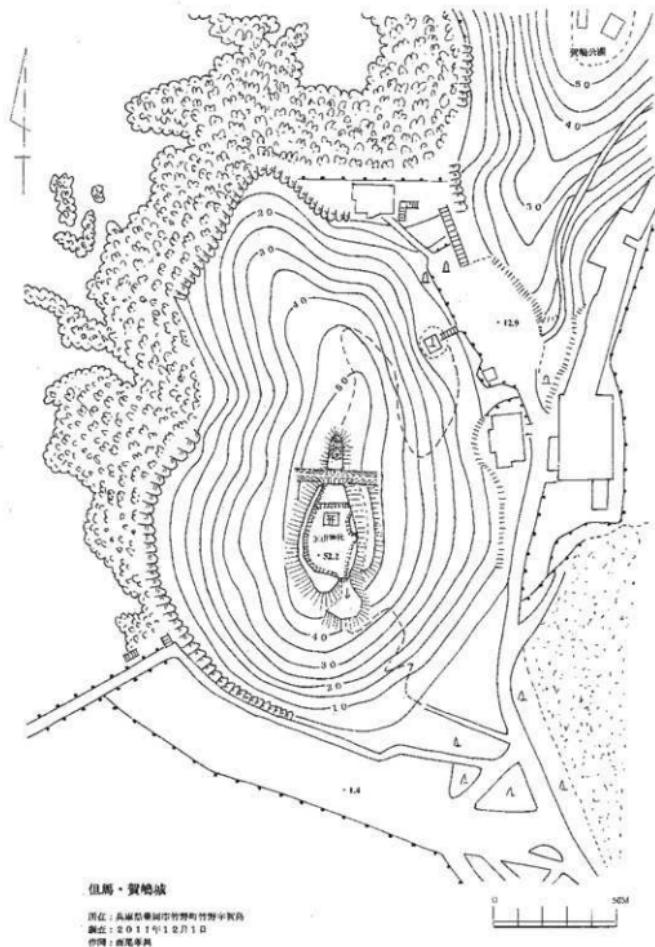
第4-4図
西桂見「南側土壠」F地点 (1/2000)



第4-5図
西桂見「南側土壁」G・H地点 (1/2000)



第5図 因幡・大崎城跡 (1/2000)



第6図 但馬・賀鳴城跡 (1/2000)

鳥取城の古写真について —新史料による評価の試み—

佐々木 孝文

1. はじめに

近世城郭は、日本の建造物としては、最も古くから被写体に選ばれてきたもののひとつであろう。

近年の研究で、これが偶然の所産ではなく、城郭建築のシンボリックな存在感と、崩壊に瀕していることへの危機感から、意識的に撮影されていたことが指摘されている。たとえば木下直之は、明治4年に江戸城の写真を数多く撮影した蜷川式龍の例を挙げている^(注1)が、蜷川の上司であった町田久成が、翌明治5年、名古屋城保存の建白を行っている^(注2)ことから見ても、このころから城郭の文化財的な側面に注目して被写体とする発想があったことは間違いない。また、藩の重臣であった松平国忠が撮影した津山城のように、地域のシンボルとして記録されたものもある。

外国人写真家による観光写真としても、日本独特の城郭建築は格好の被写体であった。明治4年以降は、軍用地などとして撮影が制限されることもあったようだが、その後消滅したものを含め、かなり多数の城郭建造物が撮影されている。写真の撮影自体が費用的にも機械的にも大きな負担を要していた明治初年において、城築は優先順位の高い被写体であった。

鳥取市においても、やはり「明治12年の鳥取城の取り壊しの際、喜多村勘四郎が撮影した鳥取城の写真」が「写真撮影の嚆矢」とされている。言い換えるれば、鳥取城の建造物の古写真はすべてこの時に撮影されたものであり、それより古いものはないと考えられてきたのである。

ところが、子細に写真を見比べると、必ずしもこれらの写真が、短期間に撮影されたものとは言い切れないのではないかという疑念がわいてくる。

被写体である鳥取城の建造物の状態が、写真によっては大きく異なっているからである。それは、後述するように、ある写真には写っている建造物が、ある写真では既に存在しなくなっている、という、かなり大きな相違である。これまで、写真単体では、この相違が、短期的な解体過程を示すものなのか、より大きな時期差を示すものなのか、確証を得ることができなかつた。

本稿では、近代史料によって鳥取城の解体過程を考察し、被写体の状況を突合することで、この問題について一定の結論を導き出したいと考えている。

2. 鳥取城の建造物の解体過程

鳥取城は、幕末～明治初年まで従来に近い形で管理され、明治4年の廢藩置県に伴い兵部省管轄下に入った。明治5年には陸軍省が建造物の解体・払い下げを計画したが、この時は政府の事情で中止されている。

その後、明治6年に所謂「廢城令」が出された際には、陸軍省所管の「存城」とされた。陸軍省は鳥取城の建造物を調査し、要・不要に分けて、明治8年に不要物件の解体払い下げを行った。

この時残された三ノ丸の既存建屋は、明治10年に改修を受け、姫路からの分遣隊の営所として使用されたが、明治11年いっぱいでの機能は廃止されている。明治12年中には残っていた建物も解体撤去され、明治13年には借地として貸し出された場所もあった^(注3)。

概ね鳥取城の建造物はこのようなプロセスで解体されていったわけだが、従来、それぞれの段階で、どの建物が解体され、どの建物が残されたのかという点が不分明であった。

最近になって、堀田正之の論文を通じて、兵庫県立歴史博物館の所蔵する鳥羽正雄コレクションの中に、工兵第四方面の雑誌の用いられた、鳥取城の調書が3種類存在していることを知り、閲覧の機会を得た^(注4)。これらの資料は明治10～13年の鳥取城の調書であり、これまで不明確だった島根県時代の鳥取城の状況、そ

れも明治12年の建造物解体の前と後の状況を知ることができるものであった。

史料① 烏羽正雄コレクション H 11-2次-13-(16) 「鳥取城履歴及景況書」

史料② 烏羽正雄コレクション H 11-2次-13-(3) (鳥取城・朱書「チ」)

史料③ 烏羽正雄コレクション H 11-2次-13-(15) (鳥取城・朱書「G」)

これらは、戦前の城郭史編さん事業にあたり、参考資料として鳥羽が簿冊から取り出したものがそのまま手許に残されたものと思われる。鳥取城のほか、姫路城・彦根城については3種類、岡山城については2種類、広島城・松江城・姫路城についてはそれぞれ1種類が残されており、いずれも明治10年～14年の間に作成されたものである。用紙や記載方法から、もとは3種類の簿冊にそれぞれ綴られていたものと思われる。

これらは、陸軍省による全国の城郭の現状把握と、建造物などを保存すべき城郭・軍事施設として必要な城郭・不要な城郭の選別のための資料とする目的として行われた調査の成果であると考えられる。いずれの城郭でも豊富に資料が残っている時期ではないと思われ、また、陸軍省がどのような視点で近世城郭を見ていたかを示す史料として重要である。特にこの時期、鳥取県が島根県に併合されていたために地元に残された資料の乏しい鳥取城については、その重要性は極めて高い。

本稿に全文を掲載することはできないが、これらの史料①～③を、記載内容に沿って年代順に並べると【表1】のようになる。また、史料②には、現存する建造物が【表2】のように具体的に書き上げられている。

先に述べた、史料でプロセスを勘案すると、史料②は明治10年4月以降11年12月までの間に作成されたもの、史料③は明治12年以降鳥取県が再置される明治14年までに作成されたものであることが判明する。

従来、明治8年にどこまでの建造物が解体され、どのくらいの建造物が兵営として使用されたのか、具体的に把握することができていなかったが、これらの史料により、明治8年から12年にかけての建造物の状況と変化を知ることができる。明治10年2月の段階でも、山上の天守に附属する番小屋らしき建物をはじめ、二ノ丸の櫓群、三ノ丸の御殿・土蔵など多数の建造物が確認できることから、明治8年に撤去された建造物(＝明治10年には既に無かった建物)は、

- ① 樽4棟・土塙を除く二ノ丸の建物(弘化年間建築の御殿を含む)
- ② 土塙を除く天球丸の建造物(武具蔵・武場等)
- ③ 単門(門扇)・橋を除く櫓門・多門櫓等の建造物
- ④ 扇御殿(現在の仁風閣敷地にあった御殿)・米蔵等

であったことがわかる。

この時解体されなかつた、二ノ丸の三階櫓や菱櫓等や、三ノ丸の御殿・土蔵をはじめとする建造物が、史料①以降、史料②までの間に、兵営として改修され、使用されたのである。

これらの建造物は明治11年12月までは兵営として備品が置かれ存続していたが、既にこの時には陸軍が売却の方針を決定しており、翌年中に解体撤去された。これは、分遣隊の廃止に伴うものであった。

そして、史料③では既に鳥取城の建造物は撤去されており、明治12年の後半以降、鳥取県再置までに作成されたものである。

したがって、鳥取城の古写真が明治12年の一時期に撮影されたものであるならば、被写体は史料②の状況を写したものであるということになる。

3. 鳥取城の古写真について

建造物の存続している時期の鳥取城の古写真について、鳥取市育委員会ではこれまでに7点の存在を確認している。トリミングや引き伸ばし、保存メディアの違いなどにより、見た目が大きく異なる場合もあるが、各被写体のアングル、樹木の映り込みなどをみれば、オリジナルが共通している場合が多く、絶対数はさして多くない。原版はいずれも失われており、二次的なプリント、絵葉書等の印刷物としてのみ残されている。

繰り返しになるが、これらの写真は從来、明治12年に、姫路から呼び戻された喜多村勘四郎という写真師によって撮影されたものとされてきた。

既に大正時代にはこの説が定着していたようで、たとえば併人・岡田機外は次のように記している。「維新後何年の頃かは覚えて居ぬが、鳥取城を取扱す事に評議が定まつた、何分徳川家に親近の御家柄にて然なきだに佐幕党的疑惑を一般から受けるので、さてこそ俄に取崩す次第となつたのであるが、其の際は未だ市内に一人の写真師が無かつた、併し其頃西町の喜多村が姫路市坂本町なる恵社入口に開業せる写真屋に見習ひをして居たので俄に直人を飛ばし右の喜多村某を呼び戻し鳥取城の写真を撮影したのであつた、此か兎に角本県に於ける写真の嚆矢なので現に市内で売り出して居る絵葉書は此写真を複写したものである」(『鳥取新報』大正9年3月3日)

意図的に演出したのか、事実を誤認していたのかは不明だが、岡田は鳥取城解体の経緯についてはステロタイプな誤解を記している(鳥取城の建物の解体は陸軍省所管時代、しかも鳥根県時代のことであり、旧藩主池田家の意向の働く余地はそもそもなかった)が、当時も永観堂という写真店を経営していた喜多村についての記述はある程度信頼できるのではないかと思われる。岡田によれば、喜多村の修行した写真店は、姫路城のすぐ側にある播磨総社の門前にあったものと考えられる(注5)。

最初に述べたように、被写体となっている建造物を比較した場合、これらの写真が必ずしも短期間に撮影されたものばかりとは考えられない。

それは、たとえば写真⑥と写真②を比較してみれば明らかである。写真⑥は、鳥取城の大手登城路を撮影したもので、城の向かい側にあった武家屋敷の長屋門の上のようなところから撮影したものと思われる。擬宝珠橋に歩行者がおり、中ノ御門の表門と櫓門、太鼓御門の門檻が写っている。それに対して、写真②には、擬宝珠橋と三階櫓は写っているが、中ノ御門については、門も櫓も土塙も無くなってしまっている(図版①)。

のことから、写真⑥⇒写真②の順に撮影されたことは一目瞭然であるが、この間の時間差がどの程度のものなのか、從来確定することができなかつた。

先に述べたように、この時期の鳥取城は史料②に記述された、明治8年の、建造物の一部解体撤去を経た状態であった。すなわち、この時点では、門櫓・米蔵や扇廊、土塙の多くは既に撤去されており、兵營として使用されていた二ノ丸の櫓4棟と、三ノ丸の御殿・土蔵などが残っている姿でなければならない。

実際、写真の大多数はこのような状態の鳥取城を撮影しているようである。二ノ丸の櫓を中心に写している写真①では、米蔵の建物と堀端の土塙が撤去されて消滅しているし、先に述べたように擬宝珠橋と三階櫓を写した写真②では、中ノ御門の渡槽が撤去されている。南御門側から二ノ丸櫓を撮った写真③でも、南御門は表門・櫓門とともに撤去されている。屋根の上から二ノ丸の櫓群を撮影した写真④は、写真②・③とアンダルが酷似しており、ほぼ同じような場所からカメラを調整して撮影されたもののように思われるが、明治12年のものと考えたい。遠景である写真⑤については、被写体だけでは年代は判断できないが、先にあげた岡田機外の「永観堂の写真が絵葉書として流通している」という記述を信頼するならば、写真①～写真④と同様、この写真も絵葉書化されているので、やはり喜多村撮影と考えうる。

問題は、大手登城路を撮影した写真 と、二ノ丸三階櫓を写した写真 である。これらはいずれも『鳥取県郷土史』(昭和7年)に、口絵として掲載されたものである(注6)。

写真⑥には、中ノ御門の表門・渡槽門及び太鼓御門の渡槽が写されており、遅くとも明治8年以前でなければ撮影不可能なものである。人物が写りこんでいるが、鬚頭・佩刀していると解釈できる(図版②)ことから、明治4年の散髪脱刀令以前である可能性もある。写真⑦については判断が難しいが、写真⑥と同じ、池田侯爵家旧蔵であるならば、同時期に撮影されたものとも考えられる。画質も、明治12年撮影と確定できるものとはかなり異なっている。また、写真⑥と写真⑦については、管見にして絵葉書に使用された例を知らない。やはり、写真①～写真④と写真⑥・写真⑦は、製作・伝来の系統を異にすると考えるべきであろう。

以上のことから、現存する鳥取城の建造物写真は

A 明治8年以前撮影のもの(写真⑥・⑦)

B 明治12年撮影のもの(写真①～⑤)

に分けることができ、從来言われている喜多村勘四郎撮影の写真はBグループに限られると考えられる。

残念ながら、Aグループの撮影時期や撮影の経緯はいかなるものだったのか、現時点では不明である。

確証はないが、『鳥取県郷土史』の池田侯爵家旧蔵の写真という記述が年代とは別に信頼できるとするならば、あるいは、鳥取城内で藩主の嫡子・池田輝知の写真が撮影されたと推定される慶応2年4月24日^(注7)前後に、あわせて撮影されたものとも考えられる。原版の所在・存非が不明なのは残念極まりない。

3. おわりに

以上のように、新出史料と写真そのものの分析によって、現在見ることのできる鳥取城の古写真は、定説と違って明治12年撮影のものと明治8年撮影以前のものに分けられることが判明し、かつ、後者については江戸時代にさかのぼる可能性もあることが判明した。

今後、新たな写真が発見される可能性はあまりないと考えられるため、これらの史料の内容や撮影の背景をより詳細に分析していくことも必要であろう。

【注】

注1) 木下直之「古写真の中の日本」、発表要旨集『学術フロンティアシンポジウム 画像資料の考古学』(平成12年、國學院大學画像資料研究会)所載。

注2) 町田久成・世古延世連名の明治5年6月7日付大隈參議宛陳情(『太政類典』第2編第214巻)。

注3) 【表3】関係資料略年表にこの間の経緯をまとめた。また、拙稿「概説 鳥取城の近代史」(鳥取市教育委員会編『資料でみる鳥取城(近代編)』所載、平成25年3月)も参照。

注4) 兵庫県立歴史博物館「塵界」15号(平成16年)所載の堀田浩之氏の論考「近代の姫路城に関する覚書—鳥羽正雄コレクションの資料紹介を兼ねて—」により、この資料の存在を知ることができた。また、堀田氏にもその後の調査・検討においても多大なるご協力をいただいた。

注5) おそらく、坂本町ではなく坂田町ではないかと思われるが、写真館については未詳である。

注6) 『鳥取県郷土史』(鳥取県学務部学務課、昭和7年)。なお、口絵のキャプションには「明治12年」と明記されているが、これは岡田機外の誤解と同様の錯誤と考えられる。

注7) 鳥取市歴史博物館展覧会図録『因幡地方の名品—鳥取市の文化財あれこれ—』(財團法人鳥取市文化財団、平成21年)所載の伊藤康晴氏の資料解説による。

【表1】鳥羽正雄コレクション 工兵第四方面野戦調査書 3点の比較

	年代	山頂	天球丸	二ノ丸	三ノ丸	扇御殿・米藏跡	門
史料①	明治10年2月(史料に記載)	城山頂僅少ノ建家アリ	此区画中元建家アリト雖トモ、現今除去シテ、以て曾残スルモノハ外圓ノ土塙ノミ	故広大ノ家屋アリト雖トモ現今之ヲ除去シ、只存スルモノハ二、三ノ櫓及土塙等ノミ	広大ノ建家及倉庫等存在セリ。柱基礎屋蓋未タ堅固ニシテ、一時兵員入屯ノ用ニ足ルヘシ	数箇ノ建家アリト雖トモ現今ニ至■■之ヲ除去シ扇殿ノ如キ只石礎ヲ存スルノミ	三個ノ城門アリ
史料②	明治10年4月以降 明治12年までの作成(兵営改修の実施後)	天守閣ノ基礎ヲ残セシ耳	建造物の記述なし	二三層ノ櫓井垣アリ	郭内巨多ノ假兵舍ニ供セシ大小家屋倉庫等存在セリ是宋タ堅結ト云フヘシ	扇殿跡	三個ノ城門跡アツテ各橋梁ヲ架シ以テ市中ニ通ズ
史料③	明治11年12月以降 明治14年までの間に作成(鳥根県時代)	天守閣ノ基礎ヲ残セシ耳	(建造物の記述なし)	櫓井坑アリ	(建造物の記述なし)	扇殿跡	三個ノ城門跡アツテ各橋梁ヲ架シ以テ市中ニ通ズ

*作成年代は①を除き記述内容から著者推定・ただしすべて鳥根県時代に作成されている。

【表2】兵営時代の建造物

名称	棟数	面積	構造等	備考
仮兵舎	1棟	450坪	平屋	三ノ丸御殿
仮病室	1棟	64坪8合7勺	平屋	松御殿か?
倉庫	4棟	合計32坪5合	二層	
被服及火薬庫	1棟	24坪	二層	
火薬庫	3棟	35坪5合2尺	二層	
大小附属家	5棟	60坪7合5勺	平屋	
櫓	4棟	合計133坪2合5勺	49坪(三層) 16坪(二層) 68坪2合5勺(平屋)	三階櫓・菱櫓・走櫓・隅櫓の4棟
大小建家	6棟	合計38坪5合7勺	平屋	
門扇	9個	5は三ノ丸・4は廊中	木造	門扉のみ残る

*史料②所載の一覧表より作成

【表3】関係事項略年表

明治4年	1871	廢藩置県に伴い、全国の城郭が兵部省所管となる
明治6年	1873	いわゆる「廢城令」出される。陸海軍築造局、鳥取城の建造物の要・不要を調査
明治8年	1875	前年の調査を受け、「鳥取城内建物萎縮ノ部」71棟が陸軍によって解体撤去される⇒史料①の状況
明治9年	1876	鳥取県が廢止され、島根県に併合される
明治10年	1877	分遣隊の兵営として改修される⇒史料②の状況
明治11年	1878	建物売却のため、鳥取城に格納していた歩兵二中隊分の陣営その他雑具等を撤去
明治12年	1879	二ノ丸三階櫓等解体撤去される(詳細不明)⇒史料③の状況
明治14年	1881	鳥取県が再置される

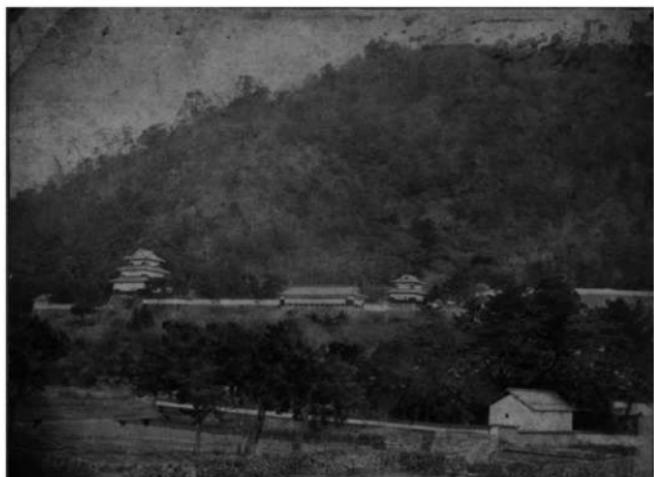
鳥取城の古写真



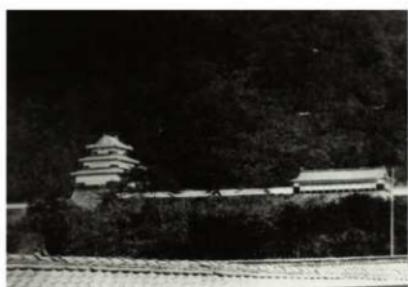
写真①



写真②



写真③



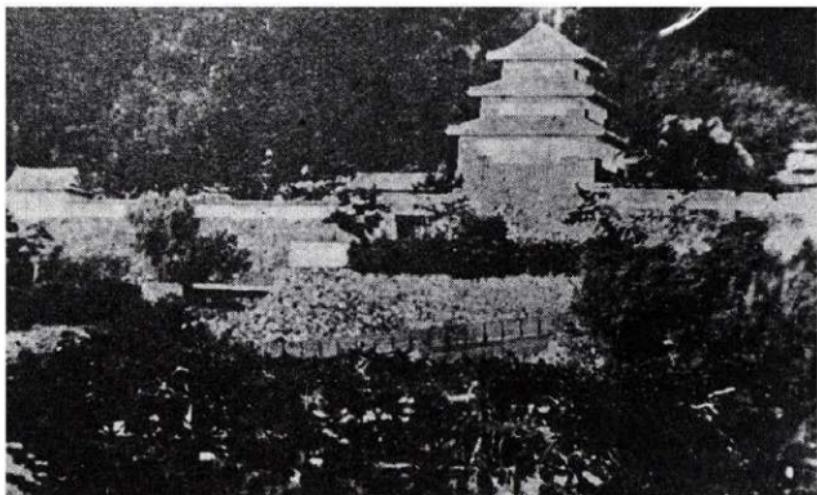
写真④



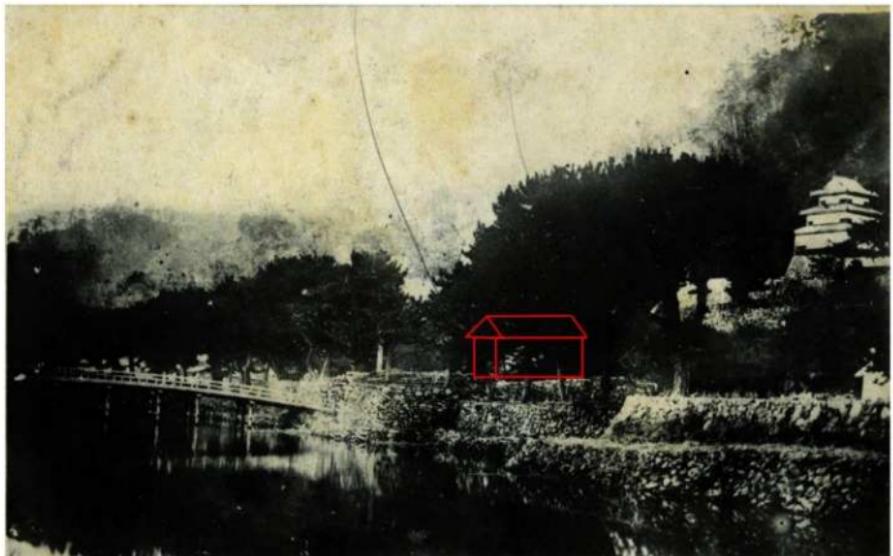
写真⑤



写真⑥



写真⑦



図版①



図版②

執筆者

八 峠 興 (鳥取県埋蔵文化財センター)

西 尾 孝 昌 (但馬考古学研究会)

佐々木 孝 文 (鳥取市教育委員会)

鳥取城調査研究年報 第6号

印刷・発行 平成25年3月29日

編集・発行 鳥取市教育委員会

印 刷 所 有限会社 螢光社